

# 永納山城跡国史跡指定 10 周年 記念シンポジウム



平成 27 年 9 月 26 日（土）  
愛媛県西条市・西条市教育委員会



## あいさつ

永納山城跡国史跡指定 10 周年記念シンポジウム開催にあたりまして、ご挨拶申し上げます。

本日、記念講演をご快諾いただきました荻谷俊介先生、またシンポジウムのコーディネーター・パネリストの諸先生方におかれましては、ご多忙のなかご出席を賜り厚くお礼申し上げます。

永納山城跡は、1977（昭和 52）年、当時の東予市文化財専門委員による遺跡分布調査中に発見された古代山城です。663 年の白村江の戦い前後の東アジアにおける国際的緊張関係の下に築かれたと考えられており、日本書紀等の「<sup>りっこくし</sup>六国史」に名前が記載されていない「<sup>こうごいし</sup>神籠石系山城」に分類されています。

現在のところ、愛媛県内で唯一確認されている古代山城であり、列石や土塁等築城当時の姿を良好に残していることから、2005（平成 17）年 7 月に国史跡に指定されました。その後も現在に至るまで発掘調査が行われ、様々な事実が明らかになっております。様々な面でご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様方に対し、改めてお礼を申し上げます。

郷土に残された歴史・文化遺産を後世に伝えるのは、我々に課された使命であります。このシンポジウムが市民の皆様、永納山城跡はもちろん、西条市の多くの文化財により興味を持っていただける契機となりますことを心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

2015 年 9 月 26 日

西条市長 青野 勝

# シンポジウム日程

主催者挨拶 13:00 青野 勝（西条市長）

## 【第1部 記念講演会】 13:10

『<sup>こうごいし</sup>神籠石系山城の源流を求めて』

荻谷 俊介（日本考古学協会会員・俳優）



荻谷俊介氏

### 講演概要

弥生時代終末期から古墳時代前期を専門分野とする私なので、古代山城に関しては解らないことだらけです。先学の古代山城研究を踏まえたうえで、今回は敢えて別の視点からの問題提起をしてみたいと思います。

それは、城壁に看取れる工法の違いから築城技術の源流を求め、史書に記載されていない古代山城＝神籠石系山城には、特殊な一面があること、なぜ史書に記されなかったかを探って、今後の古代山城研究のために何らかの刺激にでもなれればと考えています。

古代山城は史書記載の7城、記載のない16城の合計23城が確認されています。但し、史書記載の中でも長門城・三野城・三尾城・稻積城・常城・茨城の所在が確認されていないのが現状で、古代山城は少なくとも29城ほどが築かれていた可能性があります。そのなかで、半数以上の古代山城は、なぜ史書に記載されなかったのでしょうか。

## 【第2部 パネルディスカッション】 14:10

### 個別報告

『朝鮮半島と日本列島の古代山城』

亀田 修一（岡山理科大学教授・史跡永納山城跡保存整備検討委員会委員）

『永納山城と古代伊予国－南海道駅路と伊予国府－』

白石 成二（元ソーシャル・リサーチ研究会代表・史跡永納山城跡保存整備検討委員会委員）

### 討論 15:05

コーディネーター

下條 信行（愛媛大学名誉教授・史跡永納山城跡保存整備検討委員会委員長）

パネリスト

講演者・各報告者

### 閉会 16:00

---

## 目次

|                        |       |    |
|------------------------|-------|----|
| 永納山城跡の概要               | 岡島 俊也 | 3  |
| 朝鮮半島と日本列島の古代山城         | 亀田 修一 | 9  |
| 永納山城と古代伊予国－南海道駅路と伊予国府－ | 白石 成二 | 21 |



# 永納山城跡の概要

岡島 俊也

西条市教育委員会

## 1. はじめに

**位置と環境** 永納山城跡は、西条市河原津・楠及び今治市孫兵衛作に所在する古代山城である。永納山城跡のすぐ東は<sup>まごべえさく</sup>燧灘を含む瀬戸内海に臨み、南は道前平野、北は今治平野と陸地がそれぞれ広がる（写真1）。また、永納山城跡北方には伊予国府（推定地）が、南方の北川右岸には7世紀中頃～8世紀代の瓦が出土した楠廃寺や長網Ⅰ・Ⅱ遺跡、中山川右岸には古代官道とみられる道路状遺構を検出した松ノ元遺跡といった重要な古代遺跡が位置し、永納山城周辺は陸上・海上ともに交通の要衝であったことが窺える（図2）。

**占地と規模** 永納山城跡は、永納山と医王山の2つの山を城域とし、それぞれの頂部は永納山で約132 m、医王山で約130 mを測る。城壁外郭線は中央の谷を取り囲むように尾根筋からやや下った外側斜面を巡り、山中を一周する（図3）。城壁の全長は、推定部も含めて約2.5 kmを測り、その範囲は東西約470 m、南北約720 mである。

## 2. 概要

### （1）遺構

**城壁外郭線** 古代山城特有の列石と土塁によるものが主体となるが、西部頂上付近等では石積み、急傾斜な南部から東部にかけては山中に露出した岩盤（自然地形）をそれぞれ城壁外郭線としている。列石は土塁基底部に横一列に並べられ、その大きさと石材は、幅約0.3～1 m前後の花崗岩類が用いられている（写真6）。

①土塁（図1） 現在までに確認されている永納山城跡の土塁は、内托土塁（山の尾根の傾斜を利用して構築する土塁）である。構築方法は基本的に、基底部に列石を据えるため、地山を削り出し、



写真1 永納山城跡遠景（南から）

表1 永納山城跡の発見から現在

| 年    | 事柄                                                                       |
|------|--------------------------------------------------------------------------|
| 1977 | 遺跡分布調査中に永納山城跡発見<br>試掘調査及び1次調査開始                                          |
| 1978 | 2次調査（～1980年まで断続的に実施）                                                     |
| 1980 | 『永納山城遺跡調査報告書』刊行                                                          |
| 2002 | 「永納山城跡調査指導委員会」設置<br>国史跡指定を目指した確認調査を実施（～2004年）                            |
| 2005 | 国史跡指定申請<br>『永納山城跡一平成14年度～16年度調査報告書』刊行<br>国史跡指定（7月14日）<br>国史跡指定記念シンポジウム開催 |
| 2006 | 遺構確認の為に発掘調査を実施（～2008年）                                                   |
| 2007 | 『永納山城跡保存管理計画策定報告書』刊行                                                     |
| 2009 | 『史跡永納山城跡Ⅰ』刊行<br>遺構確認の為に発掘調査を実施（～2011年）                                   |
| 2012 | 『史跡永納山城跡Ⅱ』刊行                                                             |
| 2014 | 「史跡永納山城跡保存整備検討委員会」設置                                                     |
| 2015 | 国史跡指定10周年記念シンポジウム開催                                                      |
| 2016 | 古代山城サミットを西条市で開催予定                                                        |

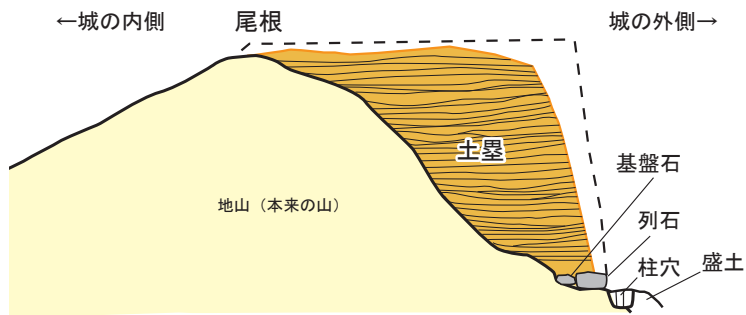


図1 土塁構築方法模式図

盛土により平坦面を造成する。その後、平坦面に列石を据え、その上に土塁を構築するための盛土を施す。その盛土は、何層にもわたって突き固める（版築<sup>はんちく</sup>）工法をとる。また、列石前面に柱穴を確認できた調査区もあり、その役割として堰板の支柱や列石を据える際の基

準杭の可能性が考えられる。残存状況は、よく積まれたところで、高さ約2.6m遺存しているが、表土流出や後世の損壊等も随所で確認でき、本来の高さや角度は定かではない。土塁の高さは、自然地形に依拠するところが大きく、内托土塁を採用している永納山城では尾根頂部が低ければ土塁の高さも低くなる。また近年の調査では、列石から尾根頂部の距離が短いもの、列石から尾根頂部の距離が長いものの2種に分類できる可能性が示されている。

②石積み 現在3箇所で石積みを確認している。その内の西部頂上付近の石積みは、最大規模のもので、幅約20.7m、最大高約1.8mを測る（写真7）。石の大きさと石材は、幅約0.4～1mの花崗岩類が用いられている。石材には加工された痕跡が確認できず、その積み方は粗い。石積みは最大4段確認でき、最下段の石は地山を削り出した後に積まれている。その傾斜は約70～85°を測る。

鍛冶関連遺構 当該遺構の検出は、岡山県総社市鬼ノ城に次いで古代山城では2例目である。検出遺構は、鍛冶炉の他に炭置場や金床石<sup>かなとこいし</sup>等がある（写真10）。金床石の上面は平坦で、鉄錆<sup>てんざうはくへん</sup>あるいは鍛造剥片と考えられる鉄分が付着していたが、被熱痕は確認できなかった。金床石に用いられた石材は、永納山の基盤に存在しないことが研究成果から明らかとなり、外部から持ち込まれた可能性が高い。

その他の遺構 城壁に付属する城門・水門推定地に対する調査を実施した。城門については、可能性の高い遺構を検出したものの、全体像がつかめておらず推定に留まる。また、内部施設については尾根の平坦面や緩やかに下る斜面等を40箇所程調査したが、上記の鍛冶関連遺構以外の永納山城に伴うと考えられる遺構は検出していない。

## （2）遺物

永納山城跡からは、出土量はそれほど多くないが縄文・弥生時代をはじめ、飛鳥・奈良時代～現代までの遺物が出土している。出土した遺物は、土器・陶磁器・土製品・石製品・鍛冶関連遺物等で、量的には土器が多い。時期別では、永納山城が機能していたと考えられる飛鳥・奈良時代の遺物が大半を占める。

永納山城に伴う土器 近年の調査で時期推定ができる土器の出土量は徐々に増加しつつある。出土土器には、概ね8世紀初頭～前半頃の時期幅を示す土師器<sup>とさい</sup>坏（赤色塗彩含む）・鉢、須恵器<sup>ふいごはぐち</sup>坏蓋（写真11）・壺・甕<sup>てっさい</sup>等がある。

鍛冶関連遺物 轆轤<sup>りゅうじょうさい</sup>羽口・鉄滓<sup>てつさい</sup>・鍛造剥片・粒状滓<sup>りゅうじょうさい</sup>・棒状鉄製品等がある。鍛冶関連遺構やその周辺から年代を決める手掛かりとなる土器が出土していないため、これらの遺物は永

納山城を築城するときのものか、それとも修理等に関わるものかは判断がつかない。

### （３）永納山城跡の年代

前述の土器は土塁崩落土中等から出土しており、永納山城の年代を直接示すものではないが、当該時期の土器が他の時期の土器に比べ多く出土すること等から、少なくとも８世紀前半頃まで永納山城が存続していた可能性が考えられる。また、炭置場から採取した木炭１点に対し、化学分析としてAMS（放射性炭素）年代測定法を実施し、あくまで参考値ではあるが、637calAD-666calAD、607calAD-675calAD という２つの年代幅を得ることができた。この年代は、古代山城が７世紀代の国際的緊張下に築かれたとする説に立つと矛盾のない年代ではあるが、測定資料が１点のみということもあり、そのまま鵜呑みにはできない。それでも、新しい試みを行うことができ、貴重な成果を得られた。

## ３．今後の課題

永納山城跡の状況は、次第に明らかになりつつあるが、課題も多く残されている。遺構については、後世の損壊や木々の繁茂により遺構面が破壊を受けている箇所も多数存在する。そうした中でも、内部施設の究明や城壁外郭線の把握等が必要である。遺物については、永納山城の年代を決める重要なものであるが、その年代を決めるには十分な資料が揃っているとは言い難い。しかし、これまで明らかでなかった永納山城の年代は断続的に行ってきた発掘調査や科学的手法等から、徐々に絞り込むことができるようになりつつある。今後の調査でいつ築城されて、いつ廃城となったのかこの問題についてもアプローチしていく必要がある。

また、永納山城跡は、今年度で史跡指定１０周年を迎えた。上述のように、課題は残るものの保存・整備・活用に向けた資料は徐々に整いつつあり、今年度中には保存整備基本計画を策定する予定である。今後は、これまでの調査・研究成果に基づいた整備を行い、貴重な歴史文化遺産として後世に伝えるとともに、現代社会の中で活かしていきたい。

#### 【主要参考文献】（五十音順）

岡山県教育委員会 2013『史跡鬼城山２ 「蘇る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236

西条市教育委員会 2005『永納山城跡－平成 14 年度～ 16 年度調査報告書－』

西条市教育委員会 2009『史跡永納山城跡Ⅰ』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集

西条市教育委員会 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集



写真２ 現在の永納山城跡（南東から）

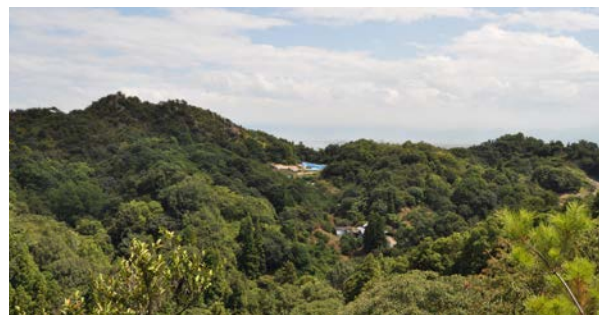


写真３ 現在の永納山城跡（尾根の向こうには、燧灘が広がる、西から）



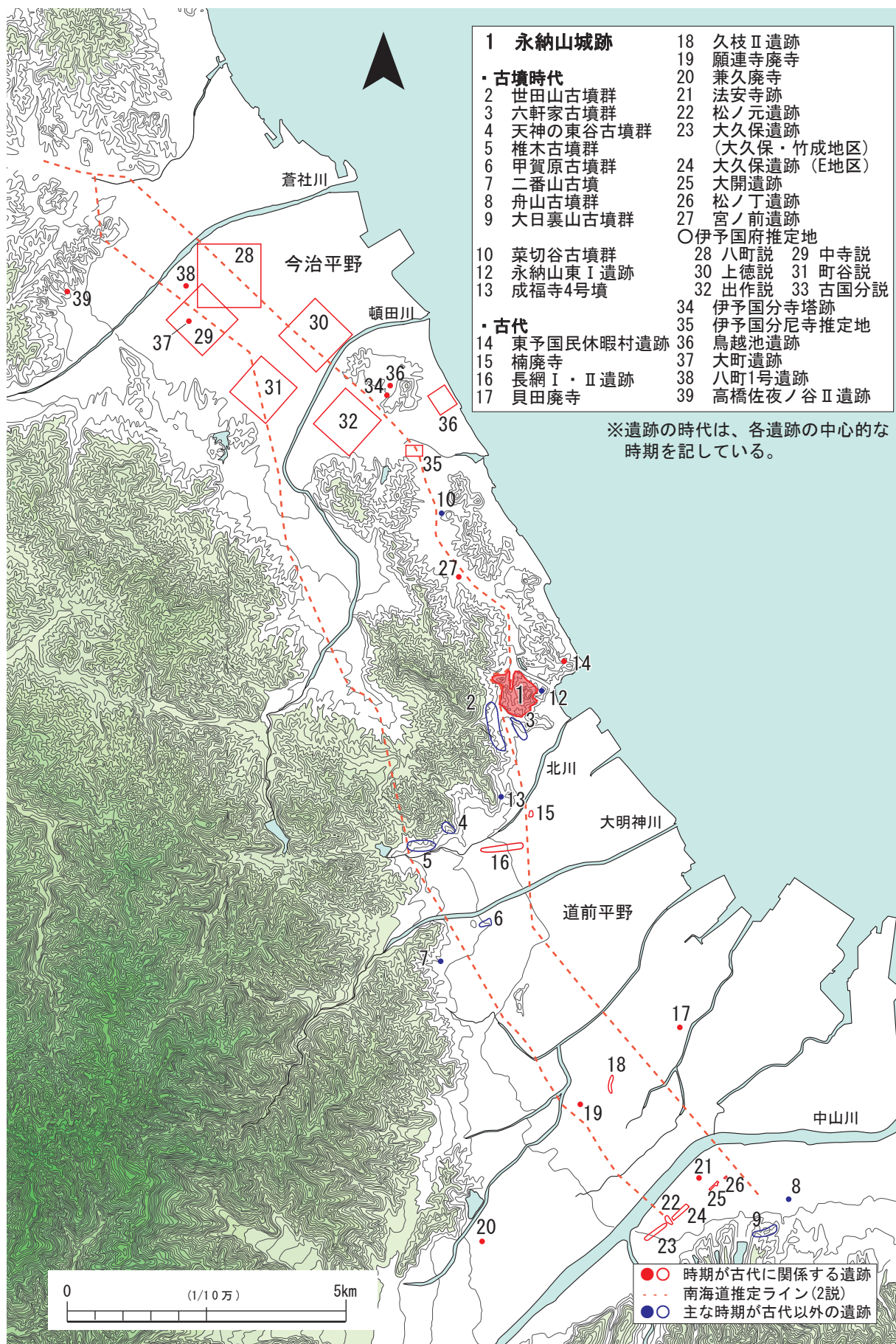


図2 永納山城跡と古代の今治・道前平野



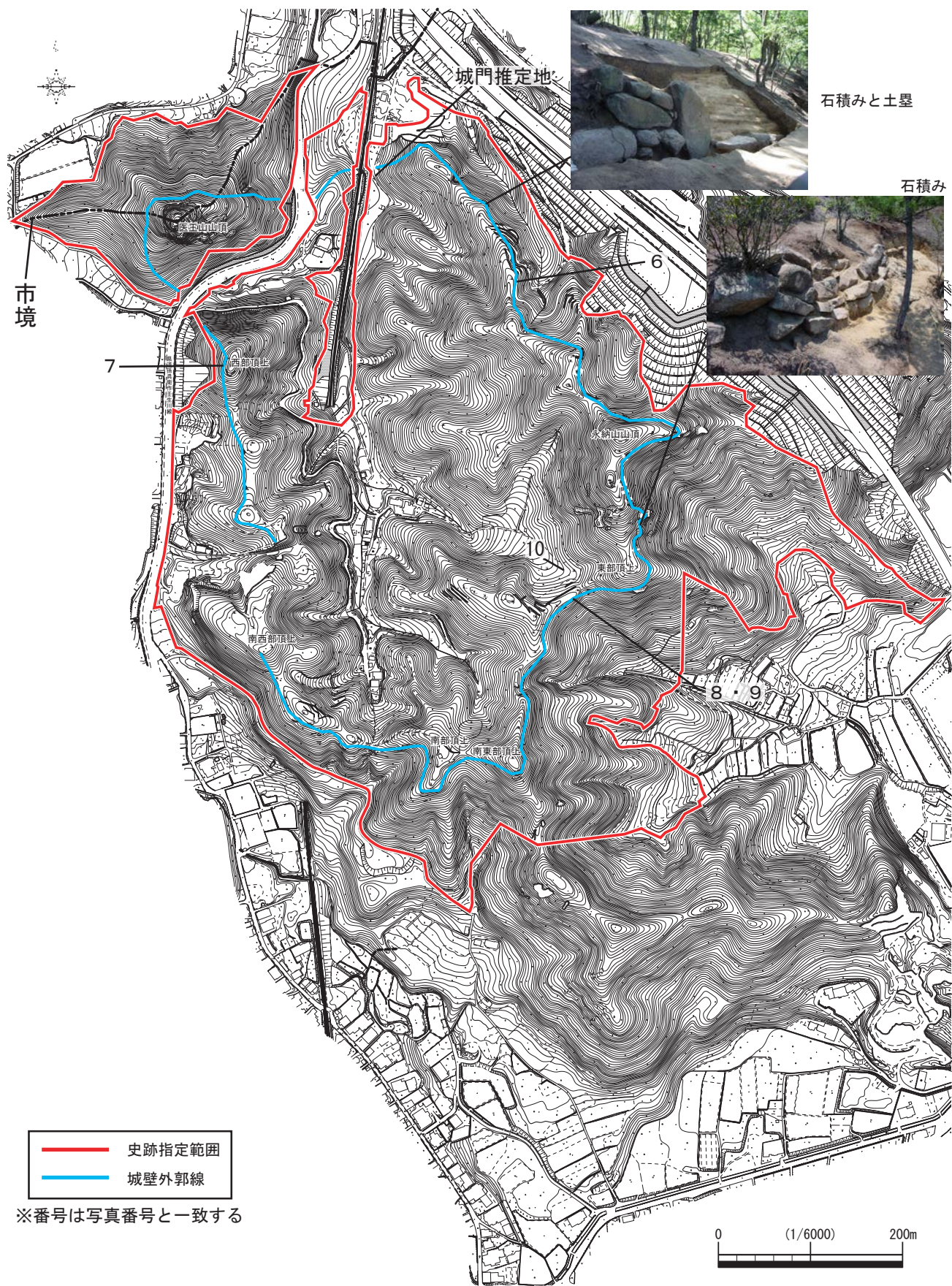


図3 永納山城跡史跡指定範囲





写真 4 永納山城跡全景



写真 5 永納山城跡遠景（北西から）



写真 6 北東部の列石



写真 7 西部石積み



写真 8 H23-1 トレンチ土壘



写真 9 H23-1 トレンチ土壘断割り



写真 10 H22-1 トレンチ  
鍛冶炉・炭置場・金床石（南西から）



写真 11 主な出土遺物

# 朝鮮半島と日本列島の古代山城

亀田 修一

岡山理科大学

## 1. はじめに

朝鮮半島の山城は、現在の中国東北部、かつて高句麗が関わったと考えられている地域のもを含め約 2000 ヲ所あるといわれている（車勇杰 1993・2010 など）。その規模は城周数十mの小型のものから 10km を超える超大型のものまである。城壁は土、石、土石混築、木などで築かれている。立地は、平地・低丘陵に築かれたものや山に築かれたものがあり、前者は土城が多く、後者は土城・石城がある。そして前者は生活空間を囲むものが多く、後者は戦闘用、逃げ込み用などに使用されることが多いと考えられている。

小稿では、朝鮮半島と日本列島の古代山城の概要について述べるが、当然のことながら朝鮮半島と日本列島の山城を網羅的に述べることは無理であり、代表的な例を抽出し、それらの概要を述べる中でそれぞれの山城の特徴を整理したいと考えている。

なお、小稿をなすにあたり、各報告書など多くの文献を参照しているが、個々に提示できないので、朝鮮半島の山城についてまとめている東潮・田中俊明両氏の著書などを代表的なものとしてあげておく（東・田中 1988・1989・1995、亀田 1995・2002・2008 など）。

## 2. 朝鮮半島の古代山城

### （1）楽浪郡の土城

楽浪郡は B.C. 108 年、漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして設置した 4 郡の 1 つである。A.D. 313 年に高句麗によって滅ぼされるまで続いた。所在地は現在の朝鮮民主主義人民共和国平安南道を中心とする地域と考えられている。治所は平壤市の大同江南側、楽浪区域土城洞一帯に比定され、土城の跡が残り、その周囲に楽浪郡時代の墓が多数確認されている。

楽浪土城は大同江に面した低丘陵を含む平地部に築かれた城周約 2200 m の方形を意識した不整形な土城である（最高所約 23 m）。土塁の詳細はわからないが、城内から礎石建物、塼築井戸、塼敷歩道などが検出され、「楽浪礼官」軒丸瓦、「楽浪太守章」封泥などのほか漢魏晋代の遺物が出土し、楽浪郡の治所である朝鮮県城であると考えられている。

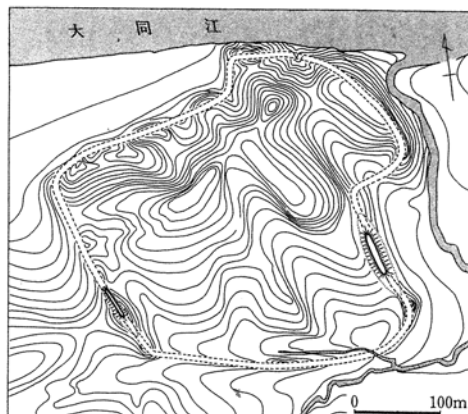
このほか、楽浪郡時代の土城としては、帯方郡治と考えられている黄海道智塔里土城（城周約 2000 m）や粘蟬県治に比定される於乙洞土城（約 450 × 300 m、方形土城）、昭明県治に比定する見解がある青山里土城（約 450 × 250 m、平面長方形土城）などがある（谷 1983、大阪府立弥生文化博物館 1993、西谷編 2007 など）。このように、楽浪郡時代の郡や県の城は基本的に平地や低丘陵上に方形を意識して築かれた土城のようである。

### （2）高句麗の山城

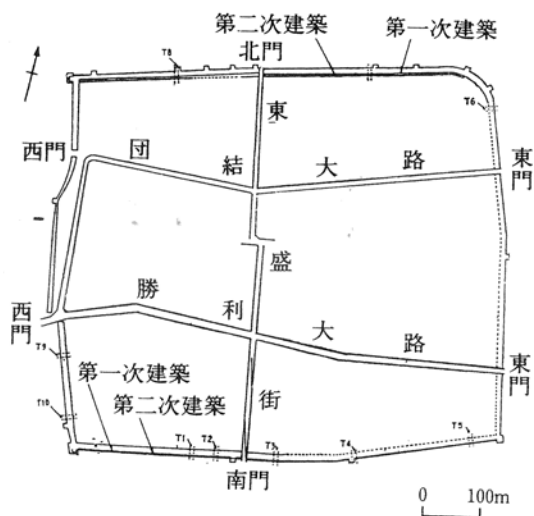
#### ①高句麗初期の山城

まず、高句麗山城の起源であるが、『三国史記』高句麗本紀、瑠璃王 22（A.D. 3）年条に、

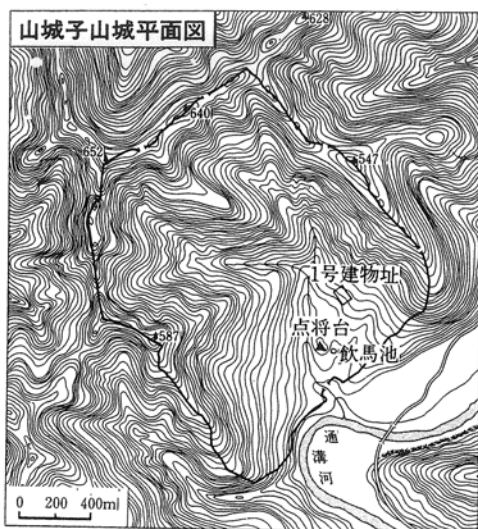




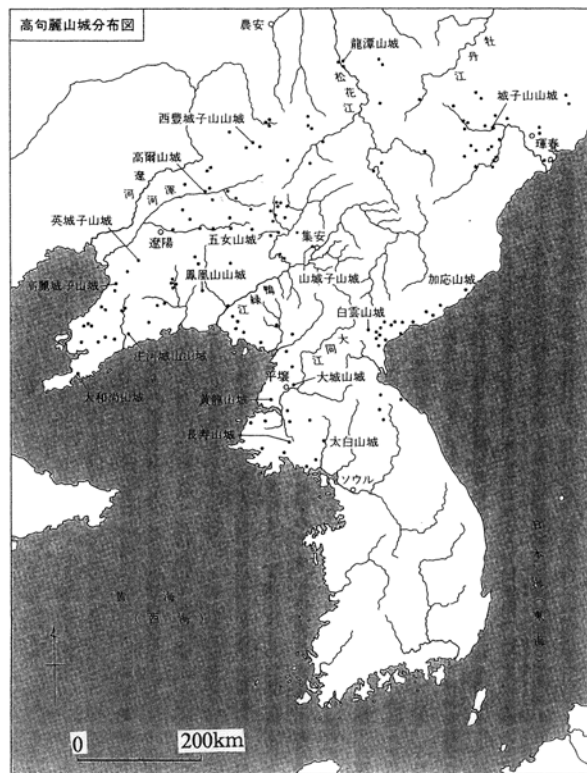
1. 楽浪土城



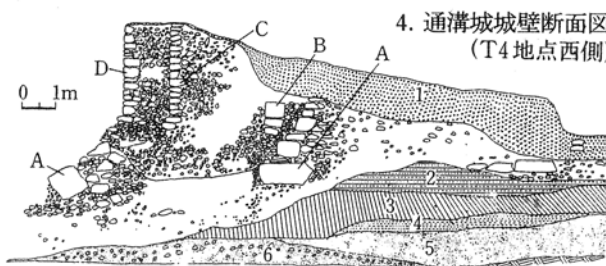
3. 通溝城



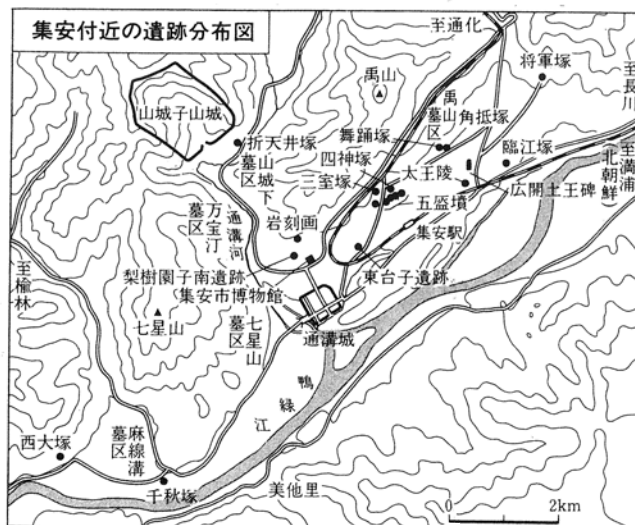
5. 丸都山城



2. 高句麗山城の分布



4. 通溝城城壁断面図 (T4地点西側)  
1. 近現代の表土層 A. 高句麗時代第1次築造 B. 高句麗時代第2次築造 C. 中華民国時代の修築 D. 「満洲国」時代の修築 2. 新発見の土塁 3. 黄土・砂の沖積層 4. 黄砂層 5. 褐色土・砂層 6. 荒砂・河原石層



6. 集安付近の遺跡分布

図1 楽浪郡と高句麗の城  
(いずれも東・田中 1995 を一部改変)

「国内城に遷都し、尉那巖城を築く」とある。また、『魏志』毌丘儉伝に、A.D. 244 年からの魏の高句麗侵攻に関して、「東馬懸車、以登丸都、屠句麗所都」と、厳しい山城であったことを推測させる記事がある。このような記録から、少なくとも 3 世紀頃には山城が築かれていたと考えても良さそうである。

**五女山城** 初期の王都とされる遼寧省桓仁に位置する五女山城は、自然の崖を使用するとともに東外側に石築の城壁が築かれている。この石築城壁に関しては、少なくとも初期のものではなく、後に築かれた可能性が高そうである。初期の城は自然の急な崖を使用して、多少手を加えただけのものかもしれない。

**国内城** 吉林省集安の平地部、鴨緑江に面して位置する通溝城がこれに該当すると考えられている。現存するものは城周 2686 m の石築の方形城で、1975 ～ 1977 年に城壁の断面調査が行われ、下層から土塁が確認され、もともと高句麗期の城があり、そこが再利用されたものと考えられている。上記のように『三国史記』高句麗本紀、瑠璃王 22 (A.D. 3) 年条に「国内城に遷都し、尉那巖城を築く」とある一方、山上王 13 (209) 年条に「都を丸都に移した」という記事もあり、さらに故国原王 12 (342) 年条に「丸都城を修理し、国内城を築いた」という記事もあり、遷都の時期はよくわかってない。王宮関連の建物は未確認であるが、城内中央付近に礎石が確認され、「太寧 4 年」(326) 銘卷雲文軒丸瓦が出土しており、4 世紀代前半には瓦葺き建物が建てられていたものと推測されている。

**丸都山城** 平地の国内城から北西約 3 km の最高所 652 m の山に築かれた石城である。城周は 6951 m と大きい。城壁は高いところで 5 m を超える。正門（1 号門跡）は内甕城形式で、西の 2 号門跡も甕城形式である。城壁に使用されている石材は方形加工の間知石も使用されている。城内には八角形や長方形の礎石建物、点将台、池などが確認されている。遺物は瓦、土器、鉄製武器・武具・工具・釘・鋌、金銅製飾り金具などが出土している。

## ②平壤城時代（427 ～ 668 年）の王城と関連する山城

**前期平壤城（427 ～ 586 年）－清岩里土城と大城山城－** 前期平壤城については、現在の平壤市街地の北東側に位置する清岩里土城がそれに該当すると考えられている。城周約 5 km の土城で、城内に瓦を出土する場所が 2 ヶ所ほどあり、そのうちの東側の散布地が清岩里廃寺である。『三国史記』高句麗本紀、文咨王 7 (498) 年条に記された「金剛寺」に当てる考えもある。また城内西側にもう 1 ヶ所確認されている瓦散布地が王宮に関わるものである可能性はあるが、よくわからない。城壁は 1995 ～ 97 年に断ち割り調査が行われ、上下 2 層あることが確認されている。そしてこの平地の清岩里土城とセットをなす山城が大城山城である。標高 274 m の乙支峰を最高峰とする山地に築かれた城周 7076 m の大型石城である。1958 ～ 61 年に発掘調査され、石築城壁、城内建物跡、門跡、雉城などが確認されている。壁の構築方法に関して、蘇文峰城壁の中間壁に柱を立てていたと推測される痕跡が見つかっており、日本の備中鬼ノ城角楼に見られる柱穴痕跡との関わりが注目される。

**後期平壤城（586 ～ 668 年）－長安城と大城山城－** 高句麗は同じ平壤地域の中で 586 年に長安城（552 年築城）に都を移す。現在の平壤市中枢部である。この城は基本的に平地にあり、王宮や関連施設、住民の生活空間も取り囲んだ石築の城壁、つまり羅城が築か



れている。市街地の東北にある牡丹峰の山城状のものまで含めると全周は約 23km となる。城内は北から北城、内城、中城、外城の 4 つに区画されている。城壁は基本的に方形に加工された間知石を積み上げており、その石の表面に「丙戌」「己酉」などの干支や「小兄」「上位使」などの高句麗の官位などが刻まれたものがある。干支はそれぞれ 566 年、589 年と考えられ、当時の城壁の工事分担などの様子を示していると考えられている。このように少なくとも 6 世紀後半の王都の城は石で城壁が築かれており、高句麗の王都の城が 6 世紀後半には土城から石城に変わったことがわかる。なお、この長安城とセットをなす山城は前述の大城山城がそのまま使用されたと考えられている。

### ③高句麗の地方の城

**ソウル峨嵯山城と周辺の堡壘群** 高句麗の南側、百済との国境地域、漢江北側に築かれた峨嵯山城とその周辺の堡壘群である。峨嵯山城はソウル特別市市街地東部の峨嵯山の南に位置する。標高 205 m を最高所とする山地に築かれた城周約 1000 m の石城である。『三国史記』百済本紀、蓋鹵王 21 (475) 年条に記された阿且 (旦) 山城がこれに該当すると考えられている。この城では 475 年の高句麗による漢城落城後、蓋鹵王がここで殺されている。発掘調査がなされ、高句麗関係資料、新羅関係資料が出土しており、新羅真興王がこのソウル地域に入ってくる 552 年以降には新羅が使用したものと推測される。

峨嵯山城周辺には小型の堡壘群が 15 ヲ所ほど築かれている。そのうちの 1 つが第 4 堡壘で、城周約 210 m の長円形の石 (垣) 城で、方形雉を付設している。城内にはオンドル建物、貯水施設などがあり、遺物としては刀・鏃・斧・甲冑などの武器・武具、轡・鏡板・鐙、車軸などの車馬具、コ字形鋤先・三又鍬・鎌・サルボ、鑿、釘などの農工具、釜などの鉄器類、壺・甕・甑・杯・皿・煙突・土製紡錘車などの土器・土製品が出土している。土器の中には「後部都口兄」「支都兄」「口王」などのヘラ書き土器があり、5～6 世紀の高句麗の国境最前線の城 (堡壘) の様子がわかる。この堡壘では峨嵯山城のような 6 世紀後半以降の新羅土器は出土していないようである。

## (3) 百済の山城

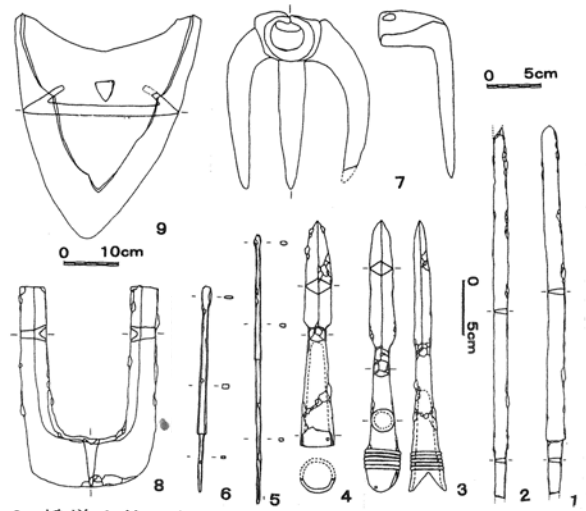
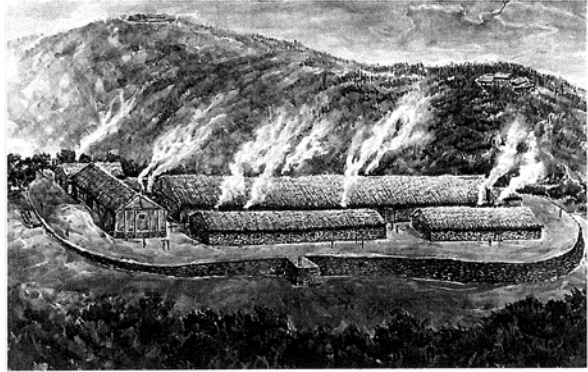
### ①前期漢城時代 (? ～ 475 年)

前期漢城時代においては、風納土城と夢村土城が王城と考えられている。ただこれらに組み合う山城については南漢山城などが候補に挙がっているが、現時点ではよくわからない。

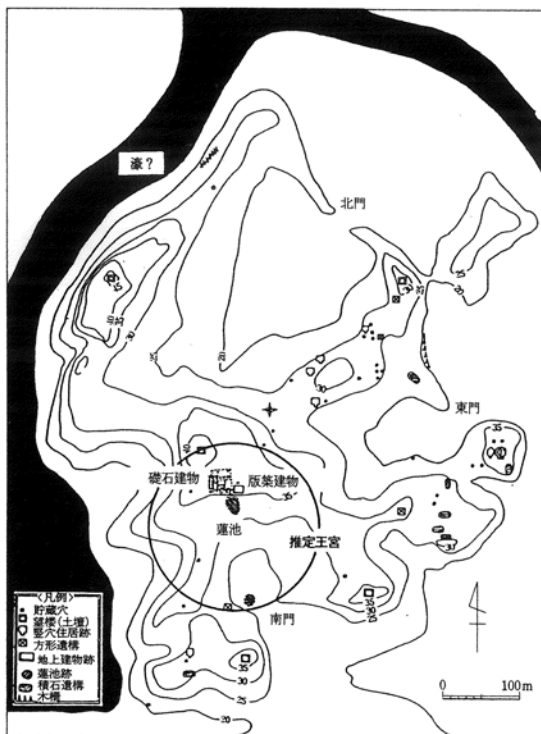
**風納土城** 風納土城はソウル特別市の漢江南岸、松坡区風納洞の漢江河畔の自然堤防上に築かれた土城である。城周は約 3500 m あり、王城にふさわしい規模を有している。土塁は、確認できた最大のは基底部幅約 40 m、高さ 10 m 以上で、版築・敷粗朶工法で築かれている。城内には王宮関連のものと推測される大型建物やその他竪穴住居など多くの遺構が検出され、遺物も西晋銭文陶器、青銅製鏃斗、瓦、一般の土器、土錘、たこ焼き機形ガラス鑄型など多数の遺物が出土している。これらの遺物は当時の百済と中国 (南朝・北朝) との関わりを示すものである。築城時期については、下層で原三国時代 (B. C. 1 世紀～A. D. 3 世紀中頃) の環濠集落が確認されており、3 世紀後半に築かれたものと考えられている。城の廃棄時期は 475 年の高句麗による漢城陥落によるものと考えられている。



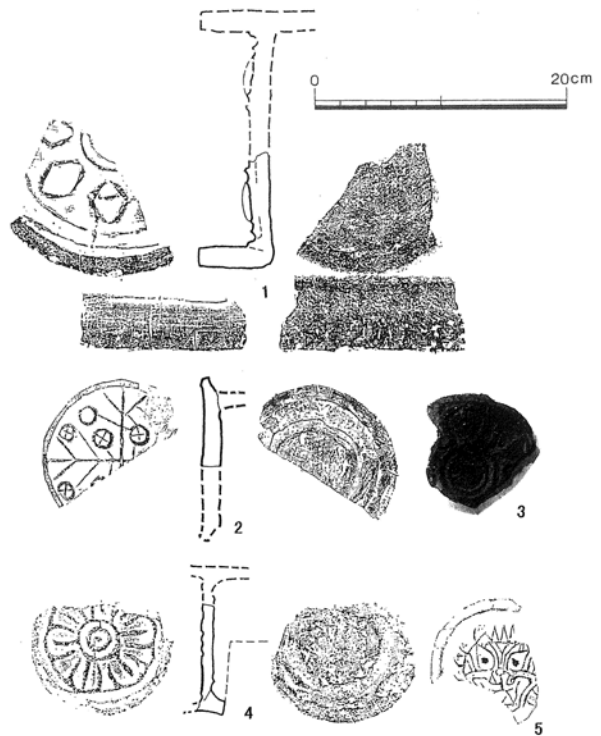
1. 漢江周辺の山城(趙ほか 1997 一部改変)



2. 峨嵯山第4堡壘復元図と九宜洞堡壘出土遺物  
(上: 崔 2000、下: 趙ほか 1997 一部改変)



3. 夢村土城平面図(亀田 2008)



4. 夢村土城と風納土城の瓦(亀田 2009)

1・4: 夢村土城 2・3・5: 風納土城

図2 ソウル漢江周辺の高句麗山城と百濟王城



**夢村土城** 夢村土城はソウル特別市松坡区芳荳洞の独立丘陵に築かれた土城である。風納土城の南約 1 km に位置し、城周は 2285 m ある。風納土城よりは小さい。北・西外側に自然の窪地を利用した濠状のものがめぐらされている。土塁は版築を使用しておらず、土塁外側の中段には柵列が確認されている。城内には礎石建物、蓮池、堅穴住居、貯蔵穴などの遺構が確認され、西晋銭文陶器、帯金具、骨製札甲、鉄矛、鉄刀、瓦など多数の遺物が出土している。これらの遺物からも風納土城とともに王城であることはわかる。しかし、遺物の内容はあきらかに風納土城のものの方が質量ともに上のようなものである。築城時期については、西晋銭文陶器などから風納土城と同じく 3 世紀後半には築かれたものと思われる。廃城時期も同じく 475 年で問題はなさそうである。

## ②中期熊津時代（475 ～ 538 年）

**公山城** 中期熊津時代は 475 年の漢城陥落ののち、南に逃れた文周王が現在の忠清南道公州市、錦江の南側の盆地に王都を定めたことに始まる。王城と考えられている公山城は標高約 110 m を最高所とする低山塊上に築かれた城周約 2660 m の土城である。北側に錦江が接しており、大きな濠の役目をなしたと考えられる。現在は石で城壁が築かれているが、それはこの城が 475 年頃築かれ、538 年に都が泗沘に移ったのちも副都的な位置づけを以て使用され、百済滅亡後も熊川州の拠点城として李氏朝鮮時代まで使用されたことによると考えられる。泗沘遷都後から統一新羅時代に土城から石城へ改築されたものと推測される。土城の痕跡は南東部で確認でき、土塁外面に高さ 1 m ほどの石垣がみられる。

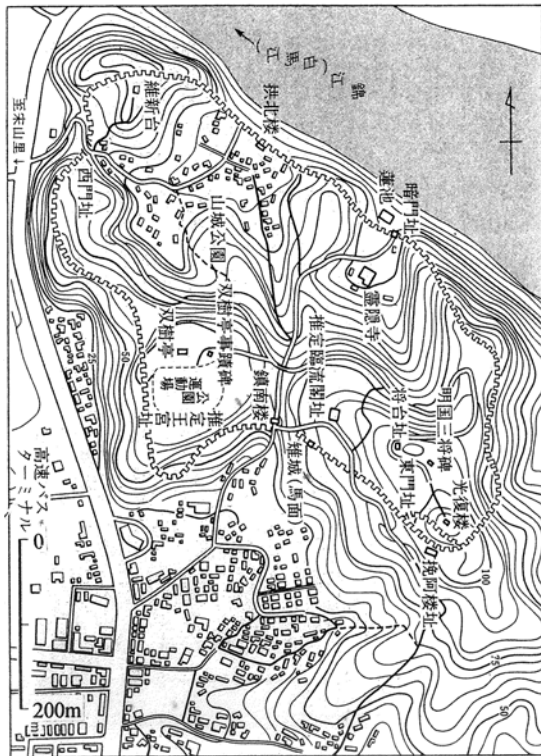
王宮は城内南西部にあったと推測されている。百済時代のものとしては礎石建物（?）、大壁建物、石組み池、木槨庫などの遺構が検出され、瓦、土器などの遺物が出土している。これらは熊津時代のものと思われるが、泗沘時代の瓦も出土している。そして前述のように百済滅亡後も使用されており、統一新羅時代以降の建物も確認されている。

この公山城とセットをなす山城に関してはよくわかっていない。また周囲の山に羅城が築かれていた可能性も考えられたが、城壁の痕跡は確認されていない。公州の外側の地域にいくつかの山城を配すことで王都防衛を行ったのではないかと考えられている。

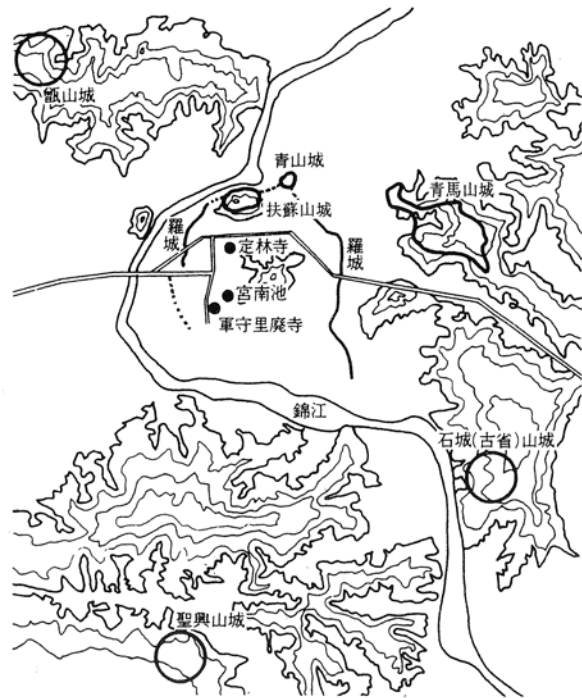
**聖興山城（加林城）** 聖興山城は王都公州の南西約 30km に位置する次の王都扶余の南側に位置する聖興山（標高 261 m）に築かれた石城である。泗沘時代の王城である扶蘇山城との距離は約 10km ある。この城の南東側には外面基礎部分に高さ 1 m ほどの石垣を持つ土塁が確認されており、この土塁部分が石城に先行する城の一部と考えられている。そしてこの土城が『三国史記』百済本紀、東城王 23（501）年に築城された加林城と考えられている。土塁部分を含めた城周は約 1400 m あり、築城時は外面に石垣を貼り付けた土塁で、6 世紀後半～7 世紀頃に石築城へ改築されたようである。

## ③後期泗沘時代（538 ～ 660 年）

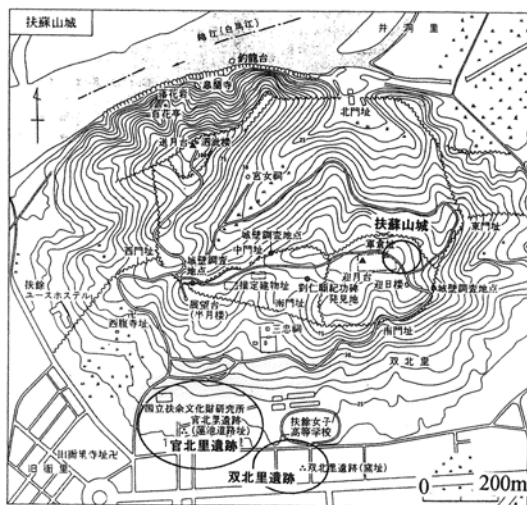
**扶蘇山城** 538 年、聖王が都を現在の忠清南道扶余郡扶余邑に移す。475 年の漢城陥落から約 60 年、百済の国内情勢も落ち着き、より広い場所に王都を遷そうと、遷都したのと考えられている。泗沘時代の王城が扶蘇山城である。王宮の明確な建物は未確認であるが、王宮関連施設遺構が扶蘇山城の南側で多数検出されており、王宮が王城から初めて外にでた都といえる。扶蘇山城は城周約 2200 m の土城で、版築で築かれた土塁の外面基



1. 公山城(東・田中 1989)



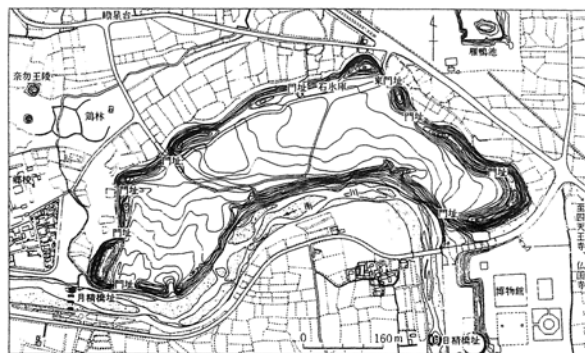
## 2. 扶余地域の山城の分布(九州歴史資料館 1978)



### 3. 扶蘇山城とその周辺出土瓦(亀田 2004)



#### 4. 慶州地域の山城の分布(九州歴史資料館 1978)



5. 月城(東・田中 1988)

図3 百済と新羅の山城

礎部分に高さ 1 m ほどの石垣が貼り付けられた部分や 2 段の板状の石が基礎部分に並べられた部分がある。城内では瓦積基壇建物、オンドル住居などが検出されるとともに、金銅製の龍頭・光背、仏像、鉄製の武器類などが出土している。築城時期に関しては、城内で



「大通」銘刻印瓦が出土しており、「大通」が中国梁の年号で527～529年であることから、造営工事は遷都以前から始まっていたと考えられている。また廃城に関しては基本的に660年の泗沘城陥落になるのであるが、『三国史記』などの記録にもあるように、その後唐・新羅の占領軍がこの地域に入り、この城を使用したようである。統一新羅時代の城壁や遺物も確認されている。また城内、南側の王宮関連地域で「大唐」銘軒丸瓦が出土している。製作技法から百濟滅亡後に唐の軍隊が王宮・王城を占領した後、この場所に占領軍施設を築造、または王宮の屋根の一部を葺き替え、そこに使用したものと考えられる（亀田2004）。

**泗沘羅城** 泗沘羅城の東羅城は、扶蘇山城から東の青山城、陵山里古墳群の西側を経て、錦江に面する城末里まで確認されている。扶蘇山城から西に伸びる西羅城に関しては、存在していなかったという考えも提示されているが、当時の港があったと推測されている旧校里くらいまでは土塁が築かれていたと考えている。西羅城の長さによって総延長が異なってくるが、ひとまず総長6 kmくらいの土塁が造営されていたものと考えている。発掘調査された東羅城では、門の場所がほぼ推定され、門南側では土塁はその外面に高さ2 mほどの石垣が築かれ、内面は粗い石が傾斜にあわせて葺かれていること、土塁自体が敷粗朶工法によって築かれていることなどが確認されている。

#### （4）新羅の山城

##### ①王都慶州の山城

**月城** 月城は慶尚北道慶州市の盆地中央、南寄りにある。城周約2400 mの土石混築の城で、南を流れる南川の流路に沿って平面形が三日月形を呈している。下層には無文土器を出土する包含層があり、丘陵部のムラがあったところに王城が築かれたようである。

月城の北側には自然の窪みを使用した濠（壕）があり、この濠は7世紀後半まで使用され、そして埋め立てられ、その周辺も含めて王宮関連施設、官衙域として使用されたようである。月城北東側に接して王宮の庭園である雁鴨池が674年に築かれた記事が『三国史記』に記されている。この月城を中心とした坊里制が7世紀後半に施行されたようであるが、これらを囲む羅城は築かれなかったようである。月城の城内はレーダー探査が行われ、建物の存在が推測されている。記録では朝元殿、崇礼殿などの宮殿建物があったとされている。月城の築城時期については、『三国史記』新羅本紀、婆娑尼師今22（101）年条に、「城を築いて月城と名付けた」とあるが、考古学的には周辺部の堅穴住居などのあり方から、4世紀頃に王宮としての使用が始まったのではないかと考えられている。

新羅王都の防衛に関しては、周辺の山に築かれた山城で守られていたようである。南の南山土城、南山新城（591年、約3700 mの石城）、東の明活山城（はじめは土城、後に約4500 mの石城）、西の仙桃山城（西兄山城、約3000 mの石城）などである。

##### ②地方の山城

**三年山城** 忠清北道報恩郡報恩邑に位置する石城である。『三国史記』新羅本紀、慈悲麻立干13（470）年の築城記事があり、3年で竣工したこと、そして炤知麻立干8（486）年、善山地域の人々3000名を集めて、屈山城とともに改築したことが記されている。

標高325 mの烏頂山に築かれた城周約1680 mの包谷式の石城で、高さ約20 m、厚さ約

11 mの城壁など場所によって異なるが、立派な石の城壁がめぐらされていることで有名である。懸門式の南門・東門、曲城、女牆の確認、鉄製扉軸受金具の出土など発掘調査による成果も大きく、朝鮮半島山城の代表的な例の1つである（趙順欽 2009）。

**梁山蓴池里土城** 慶尚南道梁山郡下北面に位置する城周約 1000 mの鉢巻式の土城である。発掘調査によってやや粗い積み土の土塁、構築時の柱列の使用など、新羅（旧伽耶）地域の土城のあり方を知ることができる貴重な調査例である。城内で木組み井戸などが確認されており、出土遺物より 6 世紀頃に築城されたものと考えられている。

**咸安城山山城** 慶尚南道咸安郡伽倻邑に位置する城周約 1400 mの石築山城である。伽耶地域の有名な咸安道項里古墳群の近くにあり、伽耶の山城と考えられていたが、発掘調査によって新羅が 6 世紀後半代に築いた山城であることがわかった。特に「及伐城」「甘文城」「阿ト智村」などの地名、「居利支」「阿那休智」などの人名、「稗」「麥（麦）」などの穀物名などを記した多量の木簡は築城のあり方などを教えてくれる貴重な資料となっている。

### 3. 日本列島の古代山城

日本列島の古代山城には朝鮮式山城と神籠石系山城と呼ばれるものがある。どちらも山城であり、区別する必要はないという考えもある。筆者も基本的にはどちらも古代山城と考えており、区別する必要はないのかもしれないが、土塁の前面に大型の切石列石を並べる九州の神籠石系山城の特徴はやはり注目され、西日本にある約 30 ヶ所の古代山城を単に「古代山城」と呼ぶだけではやはりやや気になり、前述の特徴も含めて、『日本書紀』や『続日本紀』などの史書に記されているものを朝鮮式山城、記されていないものを神籠石系山城として、以下説明することにする（向井 2004・2009 など）。

#### （1）朝鮮式山城

前述のように、『日本書紀』や『続日本紀』などの史書に記されたものであるが、天智天皇 2（663）年の白村江の戦いに破れた後、まず同 3（664）年、対馬島・壱岐島・筑紫国などに防と烽が置かれ、筑紫に水城が築かれる。そして、同 4（665）年、百済から来た達率答怱春初を長門国に派遣して城を築かせ、達率憶禮福留・四比福夫を筑紫国に派遣して、大野城と椽城を築かせる。さらに同 6（667）年、倭国高安城、讃吉国山田郡に屋嶋城、対馬国金田城を築く。その後文武天皇 2（698）年、大野城、基肄城、鞠智城を繕治させている。その後、養老 3（719）年、備後国安那郡茨城、葦田郡常城を停め、この頃にはこれら山城の実質的な機能は失われていったようである。

その規模は城周 2800 mの金田城から 6500 mの大野城まで、これまで述べてきた朝鮮半島の山城と比べても大きなものである。城壁は基本的に土塁であるが、谷部などに石塁が築かれている。土塁は基本的に版築で築かれており、これまではその基礎部に列石はないと考えられていたが、近年の詳細な調査によって、後述する神籠石系山城のような切石ではないが、板石・塊石を並べたものが確認されている。門構造は基本的に平門式と考えられていたが、近年の調査によって大野城、屋嶋城、金田城などで懸門式のものも確認されている。城内の施設としては、掘立柱建物、礎石建物、貯水施設などが検出されている。

遺物は基本的に土器類であるが、大野城、基肄城、鞠智城では瓦が出土している。瓦を



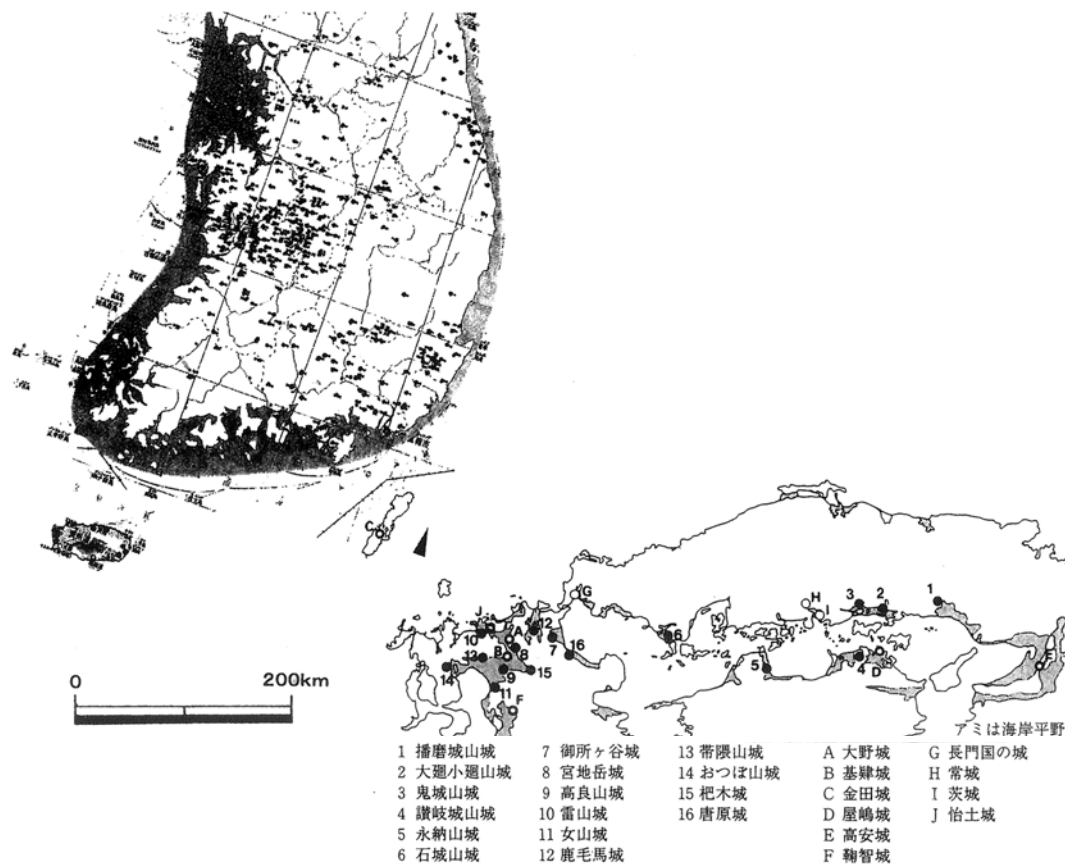
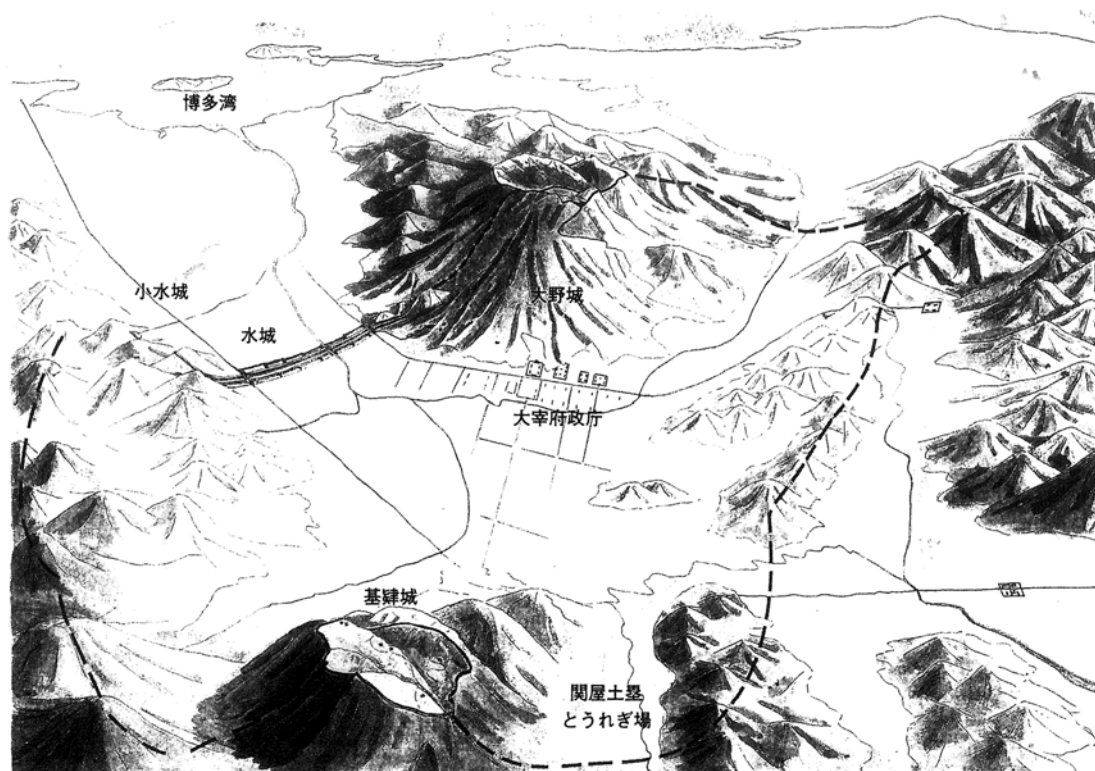


図4 日韓古代山城の分布（亀田 2009）

（韓国：韓国考古学研究会 1984、日本：向井 2004 を一部改変作成）



自然地形を利用した羅城の復元（点線は阿部義平説より）

図5 大宰府の羅城復元案（九州歴史資料館 1998）

使用する建物を有する城と持たない城、朝鮮式山城のなかでランクの違い、つまり城のなかの建物の違い、城の管理のあり方などに違いがあるのであろうか。

## （２）神籠石系山城

神籠石系山城は前述のように、現在では史書に記録がないことを大きな目安としているが、本来的には九州の切石列石が「神籠石」と呼ばれ、それに類するものが瀬戸内海沿岸地域発見されたことによって神籠石系山城と呼ばれるようになった。現時点では筑前４カ所、筑後２カ所、肥前２カ所、豊前２カ所、周防１カ所、備中１カ所、備前１カ所、播磨１カ所、伊予１カ所、讃岐１カ所の合計１６カ所である。このように北部九州の各国が各２カ所以上あり、合計１０カ所、瀬戸内海地域のものは各国に１カ所ずつで合計６カ所である。つまり古くからいわれているように、その築城地域の中心は北部九州であり、瀬戸内海地域のものは北部九州から当時の都である近畿地方への通路上に築かれたものとなる。

その構造上の特徴としては、版築土塁に伴う列石がまずあげられる。ただ、いろいろな朝鮮式山城・神籠石系山城が発掘調査される中で、本来土塁基礎部の列石がないとされていた朝鮮式山城にも列石状のものがあること、また逆に朝鮮式山城にはあり、神籠石系山城にはないとされた城内の建物が備中鬼ノ城で確認され、両者に大きな違いがないことが認識されるようになった。このような中で神籠石系山城をもう一度改めて整理してみると、九州の神籠石系山城の切石列石は大きな特徴であり、瀬戸内海沿岸地域の割石列石も朝鮮式山城の列石とは基本的に異なる。つまりいろいろな特徴を整理し直すと、神籠石系山城もいくつかのグループに分けることができる。それが時間差なのか、地域差なのか、少なくとも短時間の中で１６カ所の神籠石系山城が築かれたのではないことはいえそうである。

ちなみに神籠石系山城で出土している遺物、おもに土器であるが、それらを素直に判断すれば、７世紀中葉頃から８世紀前半頃までのものが出していることは間違いない。

## ４．おわりにー朝鮮半島と日本列島の山城ー

朝鮮半島の山城と日本列島の朝鮮式山城・神籠石系山城の類似点・相違点をあげると、次のとおりである（車勇杰 1993・2010、亀田 1995・2008、向井 2009 など）。

①日本列島の古代山城は、弥生時代の環濠集落・高地性集落とはつながらない。

②朝鮮半島の山城と日本列島の山城の占地・構造などは、大きな違いは見られず、基本的には同じグループに属しているといえる。

③朝鮮半島の山城には城周数十m～10km超のものがあり、数百m以下のものが最も多いが、日本列島の山城は基本的に2～3kmのものが多く。朝鮮半島の数百m以下の城は、基本的にムラやその地域の城、そして戦略上の城で、堡壘なども含まれている。朝鮮半島では城周1km以上の城は地方の中心拠点や王都周辺の城であり、城周3km以上のものは特別な城と考えられる。日本列島の城は城周2～3kmのものが多く、地域拠点の城が基本である。現状で日本列島には数百m以下の城はないようである。

④永納山城に関しては、城を築いた場所の高さが最高所132mとやや低く気になるが、百済の王城である公山城も最高所標高約110m、扶蘇山城も最高所標高104mと永納山城



より低い。当然防御面ではより高いところのほうが良いのであろうが、周辺の関連遺跡や交通路との関係、城内における水の確保などによってその場所は決定されるはずである。

⑤城内遺構に関して、朝鮮半島の山城ではいろいろな遺構が確認されているが、日本列島の山城では、あまり多くない。永納山城も建物などはわかっていないが、鍛冶遺構が検出されている。これが築城時のものか、それとも築城後、城を維持していくために使用されていたものか、製品は何であったのか、よくわからないが、貴重な成果である。

永納山城に関しては、さらなる発掘調査、今後の交通路や周辺の遺跡群との関わりを含めた検討などによって、より興味深い成果が上がるものと考えている。

#### 【主要参考文献】（五十音順）

- 東 潮・田中俊明 1988『韓国の古代遺跡 1 新羅篇（慶州）』中央公論社  
東 潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡 2 百済・伽耶篇』中央公論社  
東 潮・田中俊明 1995『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社  
大阪府立弥生文化博物館 1993『弥生人の見た楽浪文化』平成 5 年秋季特別展  
亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3  
亀田修一 2002「朝鮮半島古代山城の見方」西谷正編集代表『韓半島考古学論叢』すずさわ書店  
亀田修一 2004「扶余「大唐」銘軒丸瓦の語るもの」『古代文化』56-11、古代学協会  
亀田修一 2008「日韓古代山城の比較」『古代武器研究』9、古代武器研究会  
亀田修一 2009「朝鮮半島における造瓦技術の変遷」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』科学研究費補助金（基盤研究 A）研究成果報告書（研究代表：毛利光俊彦・山崎信二）、奈良文化財研究所  
韓国考古学研究会 1984『韓国考古学地図』  
九州歴史資料館 1978『甕の遠の朝廷 太宰府展 発掘 10 周年記念』  
九州歴史資料館 1998『大宰府史跡発掘調査 30 周年記念特別展 大宰府復元』  
崔 鍾澤 2000『特別展高句麗－漢江流域の高句麗要塞－』ソウル大学校博物館  
車 勇杰 1993「韓国の古代山城－型式・規模と分布を中心に－」1993 年古代吉備国を語る会 25 周年記念 夏季特別講演会発表要旨、古代吉備国を語る会  
車 勇杰 2010「韓国三国時代の山城－最近の調査資料を中心として－」『古代山城日韓シンポジウム～瀬戸内・日本・東アジアからの視点で屋嶋城の実像にせまる～』高松市教育委員会  
田中俊明 2011「日本・朝鮮軍事遺跡」荒野泰典ほか編『日本の対外関係 2 律令国家と東アジア』吉川弘文館  
谷 豊信 1983「楽浪土城址の発掘とその遺構」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2、東京大学文学部考古学研究室  
趙 順欽 2009「報恩三年山城の構造と変化」『溝漣』14、古代山城研究会  
趙 由典ほか 1997『漢江流域の高句麗要塞－九宜洞遺跡発掘調査総合報告書－』九宜洞報告書刊行委員会  
西谷 正編 2007『東アジア考古学辞典』東京堂出版  
向井一雄 2004「IX-2 山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺構編』奈良文化財研究所  
向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝漣』14、古代山城研究会

（小稿は、亀田修一「朝鮮半島の古代山城と永納山城」『平成 24 年度瀬戸内海考古学研究会第 2 回公開大会 予稿集』瀬戸内海考古学研究会、2012 年 5 月 19 日、愛媛大学南加記念ホール、pp. 87-104 を再構成したものである。）

# 永納山城と古代伊予国 - 南海道駅路と伊予国府 -

白石 成二

元ソーシャル・リサーチ研究会代表

## 1. はじめに

永納山城を含む古代山城は7世紀代の対外的危機に備えた軍事施設である。その画期となったのは天智2（663）年の白村江の戦いの大敗であった。それはまぎれもなく国家体制の転換を迫られた大事件であり、敗戦後には唐や新羅の連合軍の来襲が想定される未曾有の事態となり、その危機感は実に深刻であった。対外的な防衛システムを急速に整備するために朝鮮半島の百済の亡命官人で軍事制度の中核にいた憶礼福留・答怱春初・四比福夫・谷那晋首・木素貴子らを登用したが、彼らは「兵法に閑へり」と評されるように、大陸での戦いに精通していた武官であった。彼らの帯びた官位は「達率」で、百済の行政・軍事の中核となった5部・5方の長官はこの官位を持つ者から選ばれ、王城や地方の軍管区を守備する任務を負っていた。そうした彼らの力を利用して多数の山城を西日本に築き、臨戦態勢が整えられた。

このように古代山城は対外的危機に備えた軍事施設であるというのは通説になっているが、しかし永納山城がなぜ伊予国に築かれたのか、またその場所が律令制下の桑村郡でなければならなかったのかについては、十分に議論がなされているとはいえない。その2点について考察したい。

## 2. 永納山城はなぜ伊予国に築かれたのか

### 伊予国は軍事的要地

永納山城がなぜ伊予国に築かれたかという理由の一つは中央政府から伊予国は軍事的要地と認識されていたからである。その根拠を4点示す。

#### ①伊予総領の設置

『日本書紀』持統3（689）年8月条には「詔伊予総領田中法麻呂等曰、讃吉国御城郡所獲白鷗、宜放養焉。」とある。伊予総領として田中法麻呂の名がみえている。総領は7世紀後半に筑紫・周防・吉備・伊予

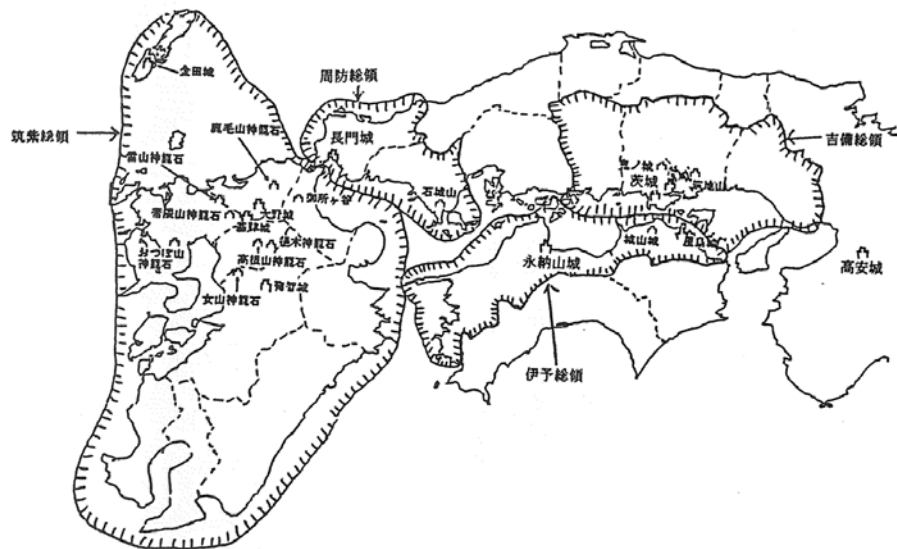


図1 伊予総領の分布



の4つの地域に置かれたが、それらは令制下の国の領域をこえた広範な地域を統括していた。そして特別区の畿内の高安城を除けば、古代山城の分布する4つの地域は全て総領管轄下にあった。総領は広域軍政官として山城を中心とする防衛体制を担う役割をもっていたと考えられる。田中法麻呂が讃岐国三木郡で捕らえた白鷺に関わっていることから、伊予総領の管轄した範囲は少なくとも伊予国だけでなく、古代山城の屋島城や城山城を擁する讃岐国まで及んでいた。

## ②「伊豫之二名島」

『古事記』国生み神話の「大八島生成」には「次に伊豫之二名島を生みき。此の島は、身一つにして面四つ有り。面毎に名あり。故、伊豫国を愛比売<sup>えひめ</sup>と謂ひ、讃岐国は飯依比古<sup>いひよりひこ</sup>と謂ひ、栗国は太宜都比売<sup>おおげつひめ</sup>と謂ひ、土佐国は建依別<sup>たけよりわけ</sup>と謂ふ。」とある。ここにみえる「伊豫之二名島」は四国全体をさしている。こうしたことから、大和王権は「伊豫」でもって四国を代表するとの認識のあったことを窺うことができる。

## ③按察使<sup>あぜち</sup>の設置

『続日本紀』養老3(719)年7月条には、「始置按察使。(中略)伊予国守従五位上高安王。阿波。讃岐。土佐。三国。」と初めて按察使が置かれた記事がみえる。按察使は地方行政監察機関の一つで、従来の巡察使と比べ、単なる中央派遣の巡視官ではなく、地方在任制をとり、その帯びる官位も高かった。特定の国司の兼官とし、この時、伊勢・遠江・常陸・美濃・武蔵・越前・丹波・出雲・播磨・備後・伊予の諸国守が按察使に任命されている。その当時、伊予国守は高安王であったから、彼は按察使を兼務し、四国全体を統括している。その統括の拠点は伊予国越智郡に所在する伊予国府であった。

## ④南海道節度使の設置

ア天平宝字3年7月3日条「従三位百済王敬福為伊予守」

イ 同年 9月19日条「造船五百艘。北陸道諸国八十九艘。山陰道諸国百四十五艘。山陽道諸国百六十一艘。南海道諸国百五艘。三年内成功。為征新羅也。」

ウ天平宝字5年11月17日条「**従三位百済王敬福為南海道使**。従五位上藤原朝臣田麻呂。従五位下小野朝臣石根為副。判官四人。録事四人。**紀伊。阿波。讃岐。伊予。土左。播磨。美作。備前。備中。備後。安芸。周防等十二国**。検定船百二十一隻。兵士一万二千五百人。子弟六十二人。水主四千九百二十人。」

エ天平宝字7年8月18日条「山陽。南海道諸国旱。停兩道節度使。」

上記の史料は藤原仲麻呂が新羅を伐つために大規模な外征軍を計画した時のものである。南海道節度使に任命された百済王敬福は従三位という高い位階をもち、長らく陸奥介・陸奥守として東北経営にあたり、武官としての能力に優れていた。その百済王敬福は新羅征討に関わる役割をもって伊予国に送り込まれたが、その管轄する国は紀伊・阿波・讃岐・伊予・土左・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防の12カ国に及んでいた。対外的な臨戦態勢の中で伊予国は12カ国の中枢の位置にあり、その軍事的重要性を示している。

このように伊予国に置かれた伊予総領、按察使、南海道節度使はいずれも広域にわたる地域を管轄しており、軍事的役割が重視されていた。このように伊予国が四国地方やもっ

と広い範囲にわたる重要な拠点であるとの認識が、『古事記』の「伊豫之二名島」という表記につながったものと思われる。

伊予国は「海の道」の要地

次に永納山城がなぜ伊予国に築かれたのかというもう一つの理由は、伊予国が「海の道」を確保するうえで欠かすことのできない要地だったからである。現在の私たちは交通の主要な手段は陸上交通という意識が強い。しかし古代の人々の目線で見ると違った風景が見える。7世紀後半に整備された七道は東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道であるが、そのうち東海道・南海道・西海道の三道はいずれも「海道」となっている。それは文字通り「海の道」であった。都からの幹線道路が駅路によって結ばれるようになると、次第に陸上の道を意味するようになるが、それ以前には全国を画一化・統一化した道路はなく、ある地域的なまとまりをもった交通網に過ぎなかった。陸上の道には多くの峠や難所があり、宿泊施設も未整備だったから、極めて危険な行路であった。『日本書紀』崇神17年7月条には、「船は天下のむねつもの要用なり。今、海の辺の民、船無きに由りて甚に歩運みちほこびに苦ぶ。其れ諸国に令して、船舶を造らしめよ。」とみえる。軍隊をはじめ大量の物資を運搬できる船は極めて重要な役割を果たしていた。大和王権にとって船や航路の掌握は不可欠であった。

伊予国が「海の道」の要地であったことを示す史料（資料）を5点示す。

①伊予国の海部

- ア「和気郡海部里調塩三斗」「刑部首嶋」
- イ「伊予国伊予郡川村郷海部里白髪□□」
- ウ「伊予国伊予郡石井郷海部里阿安曇部大隅鯛楚割六斤」
- エ「伊予国神野郡海乎知人□□」
- オ「宇和郡海部郷□知部万呂楚割六斤」
- カ『日本書紀』神武天皇条「天皇、親ら諸の皇子、舟師を帥いて東を征ちたまふ。速吸之門に至ります。時に、一人の漁人有りて、艇に乗りて至れり。天皇（中略）問ひて曰はく、“汝能く我が為に導つかまらむや”とのたまふ。対へて曰さく、“導きたてまつらむ”ともうす。」

上記の木簡史料によって多くの海部の存在を検出することができる。伊予国13郡のうち神野・和気・伊予・宇和郡の4郡に海部と阿曇部が存在する。この海部や阿曇部は単なる漁業集団ではなく、海上交通の担い手、航海技術者の側面もあった。「神武紀」の記事は、海部にそうした役割のあつ

表1 伊予国の部民

| 宇和         | 伊予                    | 浮穴  | 久米   | 温泉     | 和気               | 風早          | 野間   | 越智   | 桑村        | 周敷     | 神野    | 宇摩     | 郷名       |
|------------|-----------------------|-----|------|--------|------------------|-------------|------|------|-----------|--------|-------|--------|----------|
| 凡直・賛首      |                       | 浮穴直 | 久米直  | 伊与部連?  | 和気(別)君           | 風早直・物部首     |      | 越智直  | 凡直・大伴首・鴨部 | 多治比連   | 賀茂直   | 凡直・物部連 | 首長系豪族    |
|            | 伊予国造                  |     | 久味国造 |        |                  | 風早国造        | 怒麻国造 | 小市国造 |           |        |       |        | 国造       |
| 物部         |                       |     |      | 田部・久米部 | 秦部・物部・味酒部        | 日下部         | 物部   |      | 葛木部       | 丹比部    | 物部・鴨部 | 物部     | 文献にみえる部民 |
| 海部・乎知(越智)部 | 白髪部・葛木部・阿曇部・海部・日下部・齒部 |     |      | 丈部・凡人部 | 久米部・秦部・鴨部・葛木部・海部 | 矢田部・若日下部・刑部 |      |      | 物部・秦部・鴨部  | 鴨部・佐伯部 | 多比部   | 海部     | 木簡にみえる部民 |

たことをよく示している。エ・オの木簡は伊予国の最大豪族である越智氏と海部の結びつきを示すものである。しかもそれが越智氏の本拠地からかなり隔たった神野郡と宇和郡に所在することから、6世紀～8世紀にかけて越智氏が伊予国の海部を広い範囲にわたって統率していたとみることができる。

## ②『伊予国風土記』逸文

ア「御嶋」「伊予の国の風土記に曰く、乎知<sup>おちこほり</sup>の郡。御嶋<sup>いま</sup>。坐す神の御名は大山積の神、一名は和多志<sup>わたし</sup>の大神なり。是の神は、難波の高津の宮に御宇<sup>あめのしたしろ</sup>しめしし天皇の御世に顕れましき。此神、百済の国より度り来まして、津の国の御嶋に坐しき。御嶋と謂ふは、津の国の御嶋の名なり。」

イ「熊野岑」「伊予の国の風土記に曰く、野間の郡。熊野の岑。熊野と名づくる由は、昔時<sup>むかし</sup>、熊野と云う船を此に設り<sup>つく</sup>き。今に至るまで、石となりてあり。因りて熊野と謂う、本<sup>このもと</sup>なり。」

『伊予国風土記』逸文の「御嶋」は今治市の沖合にある大三島宮浦に鎮座する大山積神社の由来を記す。その大山積神は「和多志」の神とあるように、航海・渡航の神であった。仁徳天皇の頃に姿を現し、航海神としての威力を発揮した。百済の国から帰ってきて摂津三島に鎮座し、三島の名は摂津三島に由来するという。同書の「熊野岑」では、野間郡で熊野の船を造っていたことがみえる。熊野の船というのは熊野諸手船<sup>もろてぶね</sup>のことで、船足の速い快速船のことである。海を重要な活動拠点としている氏族にとって船足の速い船を保有することは必要不可欠なことであった。

## ③百済救援軍の熟田津への寄港

『日本書紀』斉明天皇7年正月条「御船西に征きて、始めて海路に就く。甲辰に、御船、大伯海<sup>おおくのうみ</sup>に到る。時に、太田姫皇<sup>おおたのひめみこ</sup>、女を産む。仍りて大伯姫皇と曰ふ。庚戌に、御船、伊予の熟田津の石湯行宮<sup>いわゆのかりのみや</sup>に泊つ。」『万葉集』「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ  
今は漕ぎ出でな」額田王

斉明天皇らの一行は、斉明7年(661)年1月6日に朝鮮半島の百済を救うために難波の港を出港し、大伯海(牛窓付近)を経て1月14日に伊予熟田津の石湯行宮に到着する。2ヶ月余り滞在し、3月25日に九州那大津から磐瀬行宮に到着している。この航海の中で唯一の寄港地であり、また長期滞在であることから、伊予国が「海の道」の要地であったことを示している。

## ④白村江の戦いに出兵した人々

ア『日本書紀』持統10(696)年3月条「二十七日に、追大貳<sup>つくだいに</sup>を以て、伊豫国の風早郡の人物部薬と肥後国の皮石郡の人壬生諸石<sup>みぶもろいし</sup>とに授け賜う。併て人ごとは絶<sup>あしぎぬ</sup>四匹、糸<sup>いと</sup>十紬、布二十端、鋏二十口、稻一千束、水田四町を賜う。戸の調役復す。以て久しく唐の地に苦ぶることを慰ひたまふとなり。」

イ『日本霊異記』上巻17「兵災に遭ひて、観音菩薩の像を信敬し、現報を得る縁」「伊豫の国の越知の郡の大領の先祖越智直、百済を救はむとするに当りて、遣されて軍に到りし時、唐兵に捕はれ、其の唐国に至る。我が八人、同じく一つの洲に住む。党として観音菩薩の像を得て、信敬尊重す。八人心を同じくし、ひそかに松の木を切りて一つの舟



を造り、其の像を請け奉りて、舟の上に安置し、各誓願を立て、彼の観音を念ず。ここに西の風に随ひて、直に筑紫に来る。朝廷聞き召して、事の状を問う。天皇たちま<sup>あわれ</sup>ちに<sup>あわれ</sup>矜びて、願う所を申さしむ。是に越智直言はく「郡を立てて仕えむと欲ふ。」といふ。天皇許可したまふ。然して後に郡を建て寺を造り、則ち其の像を置けり。その時より今の世に迄り、子孫相續ぎて帰敬す。けだし是観音の力、信心の至りなり。丁蘭の木母すら、猶生相を現じ、僧の感ずる画女すらも、尚哀形に応ふ。何に況むや、是菩薩にして応へざらむや。」

⑤越智氏の水軍兵力

ア『続日本紀』延暦 10 (791) 年 12 月条「伊予国越智郡人正六位上越智直廣川等五人言。廣川等七世祖紀博世。小治田朝廷御世被遣於伊与国。博世之孫忍人。便娶越智直之女生在手。庚午年之籍不尋本源。誤從母姓。自尔以来。負越智直姓。今廣川等幸属本姓。欲賜紀臣姓。許之。」

イ同書宝龜元 (770) 年 5 月条「先是。伊予員外掾從六位上笠朝臣雄宗献白鹿。勅曰。(中略) 去歲得伊与国守從五位上高円朝臣廣世等進白鹿一頭。今年得大宰帥從二位弓削御淨人朝臣等進白雀一隻。(中略) 白鹿是上瑞。白雀合中瑞。伏望。進白鹿人叙位兩階。賜絁廿疋。綿三十屯。布五十端。稻二千束。共捕白鹿五人。各叙位一階。牧長一人、挾抄二人各賜稻四百束。捕鹿處駈使三人。水主十三人。各三百束。」同 10 月条「授伊予守從五位上高円朝臣広世正五位下。掾正六位上中臣朝臣石根從五位下。介外從五位下板茂連真釣外五位上。員外介六位上百濟公水通外從五位下。外散位外從五位下越智直飛鳥麻呂。越智直南瀨麻呂並外從五位上。並是瑞国郡司。去五月有勅。進位一階。」

アの記事によると、推古朝の時代に大和王権の朝鮮出兵に深く関与した紀氏と海部を主体とする多くの航海技術者集団を保持していた越智氏とが密接な関係にあったことがわかる。またイの記事は白鹿を捕獲し、時の称徳・道鏡政権に祥瑞を献上したものである。そこに「挾抄」「水主」がみえており、白鹿は海上で捕獲し、そしてそれを献上した郡司として越智直飛鳥麻呂と越智直南瀨麻呂の両名が記されている。ここでも越智氏配下の海部たちの姿を確認することができる。

以上、①～⑤に示した記事によって、部民制の盛行していた 6 世紀頃から、奈良時代の 8 世紀にかけて、伊予国では一貫して海部をはじめとする多くの海の民が存在していた。その中には瀬戸内海航路だけではなく、朝鮮半島に至るまでの航海に関わる者がおり、対

表 2 白村江の戦いから帰還した人々

| 不<br>明             | 肥<br>後            | 豊<br>前    | 筑<br>後                | 筑<br>前 | 伊<br>予    | 讃<br>岐            | 備<br>後            | 但<br>馬      | 陸<br>奥   | 国        |
|--------------------|-------------------|-----------|-----------------------|--------|-----------|-------------------|-------------------|-------------|----------|----------|
|                    | 皮石                | 宇佐        | 上妻                    | 山門     | 早良        | 越智                | 那珂                | 三谷          | 朝来       | 信太       |
| 弓削連元宝兒             | 猪使連子首             | 韓嶋勝婆      | 筑紫君薩夜馬                | 許勢部形見  | 物部藁       | 越智郡大領の先祖          | 錦部刀良              | 三谷郡大領の先祖    | 神部直根     | 生王五百足    |
| 唐人の計略を伝えようとして帰国    | 天武 14 年に新羅を経由して帰国 | 宇佐地方の有力豪族 | 筑紫国造? 唐人の計略を伝えようとして帰国 | 軍丁     | 慶雲 4 年に帰国 | 天武 14 年に新羅を経由して帰国 | 帰国後に「立郡(評)」、寺院を建立 | 帰国後に、追大式を授与 | 40 年後に帰国 | 40 年後に帰国 |
| 皇朝開泰之運。適值群品樂生之秋。請依 |                   |           |                       |        |           |                   |                   |             |          |          |

外的な緊張が生じると、軍事的役割を付与されて動員された。伊予国が「海の道」の要地であったことが、この地に永納山城が築かれた要因の一つであろう。

### 3. 永納山城はなぜ律令制下の桑村郡に築城されたのか

#### 桑村郡の歴史的環境

次に伊予国の中でもなぜ律令制下の桑村郡に築城されたのか、あるいは築城はこの場所でなければならなかったのかが問題となるが、その前に永納山城の所在する桑村郡の古代の歴史について概観する。桑村郡は籠田郷、津宮郷、御井郷の3郷からなるが、永納山城の所在する場所は御井郷である。その郷域は楠を郷の中心としながら、三芳・河原津および大明神川北部地域である。御井郷の中心地の楠には楠神社があり、そこに愛媛県内で唯一の御井神が祭祀されている。その楠神社は通称「船戸さん」とよばれ、この神社の側に船戸神社という小社があり、その周辺には「木船」「船戸」「式渡船所」などがあり、この近くまで入り海になっていたことを示している。この地は南海道駅路が通過している場所でもあり、陸海交通の要衝であったと考えられる。

御井郷の歴史的由来として興味深いのは、この地に舒明天皇が行幸したとの伝承が残されていることである。舒明天皇が行幸した時に、この沖合で光るものを見て上陸し、この地を御意村と改めたと言い、その伝承は臼井御来迎、道安寺、実報寺・本谷温泉・大野などにも伝えられている。その舒明天皇はのちの皇極・斉明天皇を皇后とし、のちの天智天皇や天武天皇の父である。『日本書紀』には、舒明天皇は皇后とともに伊予道後にやってきたことが記されており、そうしたことが御井郷への行幸という話に発展したと思われる。

『万葉集』巻1には、舒明天皇が伊予行幸の途中、讃岐国<sup>あや</sup>安益（阿野）郡に立ち寄り、故郷の妻

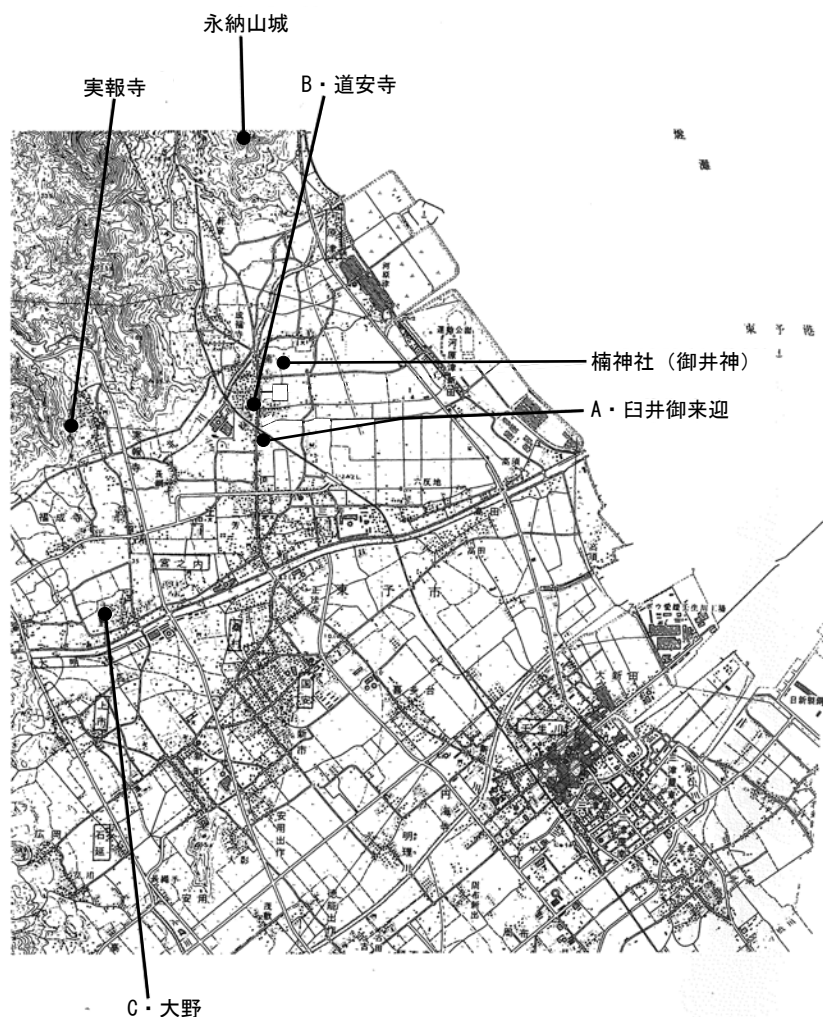


図2 古代の桑村郡

を偲んだ歌がみえる。その讃岐国阿野郡には古代山城の讃岐城山城があり、永納山城のある桑村郡とともに舒明行幸伝承が伝えられていることは注目される。

次に桑村郡に関する古代の文献・木簡史料は次の2点で、参考史料も示した。

①『正倉院文書』『伊予国正税出挙帳』<sup>おおしのあたえ</sup>「大領正八位上 凡 直 広田主帳大初位下大伴 首 大山」<sup>だいそいげ</sup> <sup>おびと</sup>

②平城京出土木簡

・「□□国桑村郡林里佐伯」

・「伊予国桑村郡林里鴨部首加都士鴨部首君中□（倭カ）」「□□□□（物部物部カ）」

※参考史料

・『日本書紀』景行 51 年条「日本武尊（中略）所献神宮蝦夷等。昼夜喧嘩。出入無礼。時倭姫命曰。不可近於神宮。則進上於朝廷。乃令安置御詣山傍。未經幾時。悉伐神山樹。叫呼隣里。而脅人民。天皇聞之。詔群卿曰。其置神山傍之蝦夷。是本有獸心。雖住中国。故随其情願。令班邦畿之外。是今播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波凡五国佐伯部之先祖也。」

・『続日本紀』神龜 2 (725) 年正月条「陸奥国俘囚百四十四人配于伊予国。五百七十八人配于筑紫。十五人和泉監焉。」

①②の史料から大伴氏と佐伯氏の存在が確認できる。この両氏は中央においては宮城を警備する十二門号氏族であり、朝廷で「内の兵」とされた軍事的豪族であった。伊予国で両者が確認できるのは桑村郡だけであり、その上に同じく軍事豪族である物部もみられることから、軍事的に重要な位置を占めていたと考えられる。また参考史料にみえる佐伯部は郡名は不明であるが、伊予国の中で佐伯氏の存在が確認できるのは桑村郡だけであるから、桑村郡の佐伯部と考えてよいと思われる。蝦夷や俘囚はしばしばその軍事的役割が期待されていた。このように桑村郡は伊予国で最小の郡ではあるが、陸上・海上の要衝であり、同時に軍事的性格を持つ氏族が多く分布していることからみて、軍事的要地でもあった。

#### 広域交通の要衝…古代山城と南海道駅路…

永納山城が桑村郡に築かれた重要な要因は伊予国府に通じる幹線道路の南海道駅路が城の直下を通過していることと深く関わる。城内を南海道駅路が通っており、まさに官道と山城とが一体化している。ここでは周囲の自然地形とあいまって隘路を塞ぐ機能が窺える。駅路の建設は、白村江の戦いの敗戦後の深刻な危機のなかで行われた。大陸から来襲する軍隊と対峙するためには、当然大規模な軍隊の編成が必要で、その軍隊をスムーズに移動させるシステムが不可欠であった。その具体的な現れが広大な幅員をもつ直線道路の七道駅路であった。そういう意味で駅路は、国家防衛体制の根幹を支えるものとして造営された。そして大規模な軍隊の編成は、地方からの徴発兵士を中核としていたから駅路は地方の拠点的地域と結ぶ必要があった。中央と地方を最短距離で結び、緊急重大の際の情報いち早く正確に伝達した。飛駅使などは1日に10駅（160 km）進むように規定されていた。そのため道路はできるだけ直線で、その幅員は小路の南海道でも9 mの大規模な道路とした。公式令行程条には車は30里と規定されているが、これは駅家と駅家との距離の30里と一致しており、これは駅家間を車で移動することを想定していたためと考えられる。つまり駅路は同時に車道でもあった。駅路が広大な幅員をもつ理由は、歩兵隊や



騎馬軍の行軍にある。『令義解』叙勲条には、「凡行軍叙勲。定簿。毎隊以先鋒者為第一。其次為第二」とあり、義解では「先鋒」について「仮令。陣列之法。一隊十楯。五楯列前。五楯列後。楯別配兵五人。即以前列廿五人為先鋒。後列廿五人為次鋒之類。凡未戰之前。預定先次鋒。故申簿之日。亦拋之為次也。」と解説している。

この「陣列之法」では、50人1隊を前列、後列に分け、前列に5楯を配置し、各楯に5人を配属し、計25人を先鋒、そして後列も同様に配置して計25人を次鋒とした。それは歩兵隊だけでなく、騎兵隊も基本的にこの隊列であった。軍団の隊編成は、行軍の際にそのまま軍事編成の単位となり、5列縦隊であればその行き違いには最大10列縦隊の移動が必要であったから、駅路の幅員が広大とされたのである。

伊予国の南海道駅路は山背→大岡→近井→新居→周敷→越智の6駅で、山背から周敷駅までのルートについてはほぼ共通理解ができているが、永納山城と関係する周敷駅から越智駅のルートについては様々な議論がある。その一つは周敷駅から桑村郡を経て永納山城の麓を通り、今治市孫兵衛作から長沢を通過して伊予国府に至るルートであり、これを仮にAルートとする。もう一つは周敷駅から標高180mの椎ノ木越を越えて朝倉から伊予国府に至るルートで、これをBルートとする。このBルートを駅路とみる見解もあるが、それはありえないだろう。

Bルートの道は狭隘な山を曲がりくねりAルートに比べて距離も長い。しかも標高の低い平野部から一気に180mの高所まで登って行かなければならない。このように距離が長く、高所のための困難や時間がかかることは、駅路の根本的意義である高速性を損ねるこ

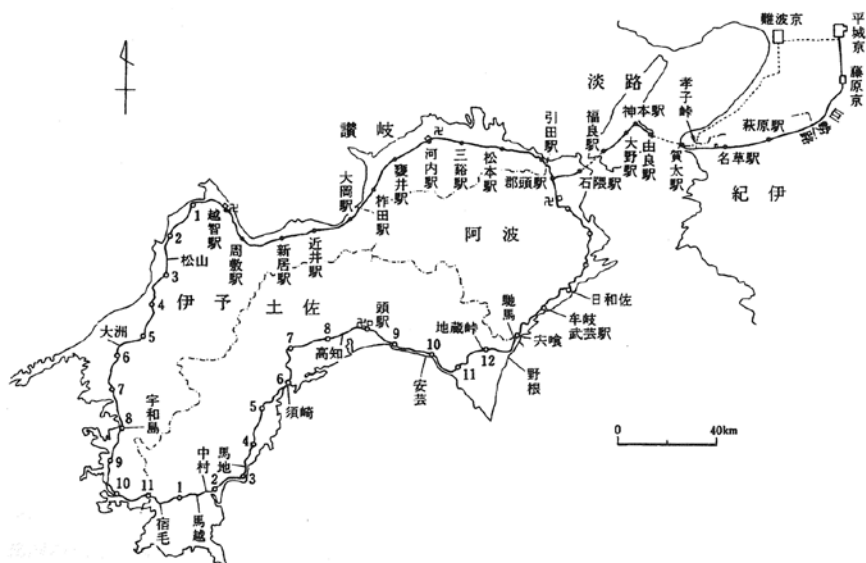


図3 伊予国の南海道（金田章裕 1996「南海道」『古代を考える 古代道路』吉川弘文館より転載）

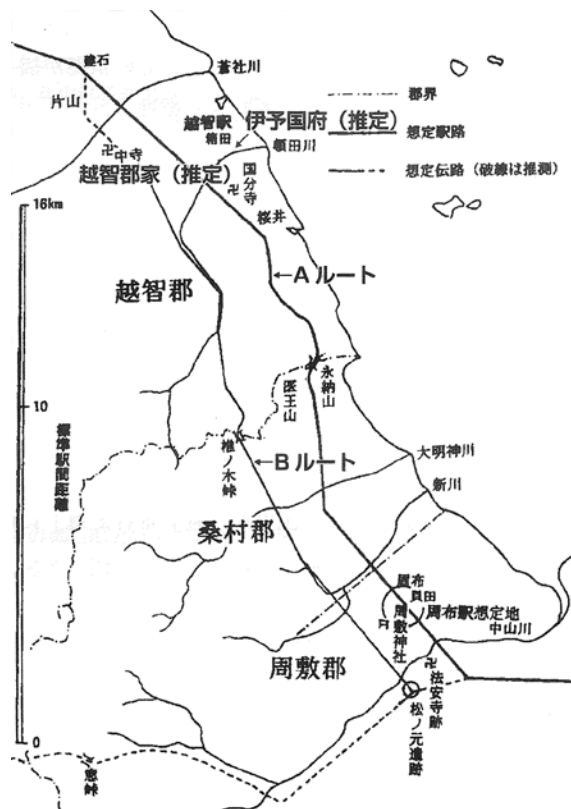


図4 周敷駅から越智駅への道（木下 2009より転載、一部加筆）

とになり、この道を駅路とすることは考えられない。したがって、直線的で平野部を通過しより早く伊予国府に到達できるAルートが南海道駅路となる。

この道路沿いに国分寺や国分尼寺や「大道上・大道下・大路里」の地名が残されていることもその傍証である。また同じ沿線の今治市桜井にある「旦」は、かつての軍団の名残ではないかとも言われる。「伊勢国計会帳」にみえる「路次団」は路次の軍団の意味であり、『出雲国風土記』の巻末記からも軍団が駅路沿いの要衝に立地していたようで、「路次団」は一般化できる可能性が高い。南海道駅路においても駅路に近接して軍団が設置されていた蓋然性は高い。軍団の施設は、庁舎・兵庫・兵舎・練兵場などから構成され、騎馬の調習場のための広い空閑地も必要であった。桜井の「旦」や桑村郡の「旦」などはその有力候補地である。

### 永納山城と伊予国府

次に、国府成立の前提となったのが初期駅路であり、両者の関係はどうであったのかという問題についてみる。古代山城が築城された頃の国衙はどこに存在したのか不明であるが、成立期の南海道駅路の軍事的役割を重視すると、国府はできる限り駅路と直結する必要があった。近年の前期国府論によると、国府の初現は7世紀後半まで遡るものは未発見で、その頃の国司はまだ独立した庁舎を持たず、拠点的な評衙・郡家を仮の庁舎として駐在し、諸評衙・郡家を巡回する形で、評・郡の政務の監察や調庸物等の徴税状況の検校、中央政府の施策の伝達などの任務を遂行したとする。また8世紀初め頃までの律令国家の地方支配が評衙・郡衙を実質的拠点とし、郡司ら在地豪族の伝統的支配力に大きく依拠して遂行されていたとされる。『出雲国風土記』巻末記の「至国庁意宇郡家北十字街」から、それは単に国府と郡家が隣接するのではなく、「国庁たる意宇郡家」と理解し、8世紀初めには、独立した国府はなく、郡（評）家に併置されていたとする説が有力視されている。

このことに関して、徳島県の観音寺遺跡が初期国府の遺構として注目されている。7世紀後半（680～690年頃）と推定される流路内から出土した木簡には「板野 国守大夫分米三升小子分用米」とある。これは初期国司による国司巡行に関するもので、国司が板野郡に巡行したか、国司館が板野にあったのではないかとされ、天武朝後半から持統朝初年の浄御原令施行以前の初期国宰の実態を語っているとみられている。この当時、国司は評衙とは別な組織を持っていたと考えられるが、観音寺遺跡では評衙と近接して前期国府が存在していた。そのことはこの頃の国司は地域の有力な諸勢力に対して超然とした存在ではなく、彼らと緊密な関係を持ち、またそれに依存しその権力を行使していたことを裏付ける。

ここからは推測に留まるが、以上のようなことからすると、前期の伊予国府は越智評に近接して造営されていた可能性が高いのではないだろうか。白村江の戦いの敗北後、国家的危機の中で、防衛体制の整備が急がれた。その一連の施策の中で、それまで松山平野にあった伊予国の政治的拠点が高縄半島を越えて今治平野に移ってきた。その象徴的な出来事としてあげられるのが、伊予国府がこの地に置かれたことと、国家防衛の拠点となるべき古代山城永納山城が築城されたことである。初期駅路は越智評に直結しており、それを基準として伊予国府が造営されたとすれば、越智評の近くに造営されることが最も合理的

であつたろう。なおその越智評は安芸国の楽音寺（広島県三原市本郷町南方）に所蔵されている大般若波羅蜜多經の奥書にみえる「越智郡給理里棧敷村」「越智本郡棧敷村」から、八町・中寺に所在していたことが確認できる。前期伊予国府・越智評と防衛拠点の永納山城を駅路を通じて直接に結ばれていたと推定される。

その後、全国的な国府の整備過程で、伊予国府でも国庁・国司館・曹司・正倉など多くの官衙建物が必要となった。国衙は大極殿を模した国庁を中心に、評衙・郡家とは独立した恒久的官衙として頓田川下流地域の拝志郷に造営された。それに伴って前期国府や越智評が保有していた駅路の交通機能は新しい国衙に付属して建設された越智駅に受け継がれた。

前期国府・駅路・古代山城の三者はほぼ同時期に築造され、しかもそれがいずれも国家的な危機に対応するという軍事的意義を付与されていたとすれば、そこに一つのマスタープランがあったと考えるのが自然である。天智3年（664）是年条に高速情報伝達の役割もつ烽火制が導入された。伊予国では烽の存在は明らかでないが、讃岐国では南海道駅路に沿って火山・火ノ山・火上山といった烽に関連するとみられる山が存在する。烽火制は国司の直接の指揮下にあり、烽長・烽子は所在する郡に関係なく配置され、また独自の運営基盤として「烽家」を必要としていた。そしてその烽も最悪の場合は、駅路を使用して連絡した。こうした国家防衛のマスタープランの中で永納山城を考察していく必要がある。

#### 【主要参考文献】（五十音順）

- 木下 良 2009『事典日本古代の道と駅』吉川弘文館
- 木本雅康 2000『古代の道路事情』吉川弘文館
- 金田章裕 2011『古代・中世遺跡と歴史地理学』吉川弘文館
- 下向井龍彦 1991「日本律令郡制の形成過程」『史学雑誌』100-6
- 白石成二 2007『永納山城と熟田津ー伊予国からみた古代山城論ー』ソーシアル・リサーチ叢書
- 白石成二 2010『古代越智氏の研究』創風社
- 松本政春 2005「古代駅路考」『日本歴史』第682号
- 森 公章 2009『地方木簡と郡家の機構』同成社
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房



永納山城跡国史跡指定 10 周年記念  
シンポジウム資料

平成 27(2015) 年 9 月 26 日発行

編集・発行 西条市教育委員会

〒 793-8601 愛媛県西条市明屋敷 164

TEL/FAX 0897-56-5151/0897-52-1210

印刷 有限会社野口印刷所

